
せいさんかっけい！

石田梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

せいさんかつけい！

【Zコード】

Z9958Y

【作者名】

石田梅

【あらすじ】

一直線上にない3つの点のそれを結ぶ線分によってできあがる図形、三角形。

眼鏡の似合う知的な生徒会副会長・真と、どこかミステリアスで儚げな少女・雪緒、そして「眼力殺傷率120%」凶悪な風貌の誠一。『城山学園高等部・謎の3人組』の描く三角形は、くだらなくも輝かしい日常生活。

恋愛してるんだか青春してるんだか、はたまた何やってんだかわからない彼らの毎日を見守るお話です。

まるで少女漫画のヒロインのようこ、まっすぐで天真爛漫なお邪魔虫が登場します。

第1話 自己紹介を兼ねまして ある日の3人組

一直線上にない3つの点のそれを結ぶ線分によってできるがる図形、三角形。

その中でも、各辺の長さが相等しく内角が60度であるものは正三角形、または等辺三角形と呼ばれている。

彼らはまさにその正三角形の体現者だ。

これは彼らのくだらない、だが本人たちにとっては至極大切で輝かしい日常。

冬の気配が近づいている。日が落ちる速度は日に日に増し、風にさらされるむき出しの首筋から寒気が走る。そろそろマートやマフラーの準備が必要だ。

その巡査は、いつも通り夜の町をパトロールしていた。

ぽつりぽつりと灯る街灯だけが頼りの道を、ゆっくりと自転車をこいで進んでいく。

田舎らしくシャッター街と化してしまっている商店街は、夜になると一層うす暗く人気がなくなる。こういう場所にこそ非行の芽は出てくるのだ。

とはいえる。最近は平和そのもの。近隣高校は大人しい生徒ばかりなようで、聞いた問題といえば喫煙・飲酒くらいのものだ。当然禁止されるべき行為ではあるが、その程度でいきがつてingなら大きな問題を起こすこともないだろう。

今日という日もおだやかに終わるはずだ。

毎日同じ時間、同じように巡回していれば、どこをどう確認するかも習慣化してくる。巡査はいつものようにフイットメインストリートの脇の路地をのぞいた。そして彼はハッと目を見開いた。ゆるみきつっていた神経が一気に張りつめられる。

華奢な体を押さえつける大柄な男のシルエット。その足元には頭を抱えてうずくまつっている少年の姿も見える。

「き、君たち！　そこで何してる！」

巡査は前のめりになりつつ自転車を突っ込ませた。とんでもない、平和どころじゃない！　市民の平和は俺が守る！

そんな使命感にかられ、巡査は自転車を飛び降りると痛烈なライトの光を浴びせた。逃げる様子もない、3人はこちらを見て固まっている。それほど驚いたのだろう。

大柄な男は思った通りの目つきの鋭い悪人の風貌だった。襟元を掴まれていたのは少女で、大きな瞳が光っている。おそらく涙がライトに反射しているのだろう。かわいそうに、今すぐ助けるからな！　頭を抑えたまま顔をあげた少年の顔は眼鏡がずり落ちているものの利発そうだ。それを見て彼は一瞬で全てを理解した。

少女に下心を抱き、からむ男。それを止めようとした通りすがりの好青年だったが、暴力に訴えられてなすすべもなく倒れてしまう。あわや絶体絶命、少女の運命は……！　というところに、正義の味方が現れた！　俺だ！！

「今すぐ彼女を離しておとなしくしろ！」

すっかり自分に酔いしれた巡査が言い放ったとき、3人は予想外の反応を示してみせた。巡査を見て一斉に「しまった」という顔をしたのだ。

「あ……またか」

男は少女の襟首を持ったまま、小さくため息をついた。そこに反省の色はない。だが、少女はおびえもせずに目の前の男にむかって

文句を言つた。

「もう、誠一さんのせいですからね」

「だからオレは言つたんだ、この場所はよくないって」

すつと立ち上がった少年は、意外に上背もありしつかりとした身体つきをしていた。頭を押されてうずくまっていたとは思えないほど元気そうだ。少年は眼鏡をかけなおしながら警官に向き直ると、2人を促して頭を下げた。

「すみません、御迷惑をおかけしました」

「わたくちすぐ帰ります」

「……すんません」

ペコリ、と並ぶ姿は一種異様だ。

「え、なに？ なんなの？」

巡査は思わず1人1人に指をさしながら困惑して尋ねた。

「ねえ、君たちモメてたんじゃないの？」

「ええ、ですから俺たちは知り合いで」

「じゃああつてただけでして」

少年と少女が肩をすくめながら説明した。男にいたつてはふてくされたようにそっぽを向いてしまつていて。落ち着いて見てみると、彼は大人の男というにはまだ幼い。体格が良いだけで年は他の2人と変わらないのだろう。だが、その話はあまりに疑わしい。

「え、えー。嘘だア。脅されてるだけじゃないの」

ちょっと信じられない、と言つ巡査に、彼らは態度で証明してみせることにした。

少年が軽く男の肩に手を回したかと思うと、少女はペトリと男の腹に抱きついてみせたのだ。それどころか左右から男の頬をつついている。男の眉間のシワは深くなるばかりだが、抵抗するつもりもないようだ。

「……幼馴染なんで」

男……というよりも一人の少年は、不機嫌そうにダメ押しの一

言を言った。

次の日の昼休み、城山学園高等部の生徒指導室にて3人を前にした生徒指導教官・篠田は、うんざりといつたため息を吐いた。

「またお前ら3人か。何度やつたら気が済むんだ？」

「すみませんでした！」

眼鏡がずれるのもかまわず、勢いよく上体を45度に折ったのは2年の宮田真。すらりとした体つきに

知的で纖細な容貌から女生徒の人気は高く、成績も優秀で生徒会副会長を務めている。

「宮田、お前は生徒会にはいっているんだからしつかりしてもらわないと困るぞ。それと有辺、お前もどうしてあんな時間にあんな場所にいたんだ」

「すみません。毛糸を買いに行っていたんです。8時以降も開いているお店は、商店街のほうにしかなかつたもので」

有辺雪緒は細く小さな声で遠慮がちに答えた。伏し目がちの憂いをたたえた瞳がミステリアスと評判の、儂さをたたえた1年生である。

「毛糸？ なんだってそんなモン……」

そこまで言つたところで、篠田は上から降つてくる威圧感に気付いた。困ったちゃん3人組の最後の1人だ。

ガタイの良さだけが取り柄の体育教師・篠田と並ぶ体格。身長では完全に篠田は負けていた。口角の下がつた口元、眉間に浮かんだシワ、とがつた鼻先。この世の全てが気に入らない、とばかりの表情だ。白目部分の多い三白眼を向けると、タールのよつなぬぐい切れない重みが降つてくるような心地がする。入学式当日に上級生から「生意氣だ」と喧嘩を売られた際、高価買取して校門を真っ赤に染め上げたことは今や伝説の一つとなつていて、「眼力殺傷率120%」と名高い坂上誠一、2年生。

篠田は思わず喉をならし、黙り込んでしまつた。

そこへすかさず助け舟を出したのが真だ。

「先生、この度は申し訳ありませんでした！ もう一度どこの迷惑は

おかげしません」

「あ、ああ！ そうだな、うん！ わかったならいい、もう紛らわしい場所でじやれあうなよ！ も、戻つてよろしい！」

ビシリッと音がするくらいの動きで頭を下げる真に、篠田は慌てて言つた。一刻もはやく誠一の視線から逃れたいとばかりだ。

「……すんませんでした」

地の底から湧きあがつたような調子の誠一の謝罪は、もう篠田の耳に届いていない。

「失礼しました！」

学生の鑑のよくなお辞儀をする真を横田で見ながら、雪緒は口元に小さな笑みを浮かべて言つた。

「もう一度と、か。品行方正・成績優秀、信頼厚い副会長サマことつては何度だつて使える手ですね。さすが真さん」

「ん？ 何を言つてる。こんな迷惑、そつ何度もかけられないだろ

う

まじめな顔をして首をかしげる真に、雪緒は肩をすくめた。

「何をいまさら。この手、今まで何度つかつたことか……」

「やめとけ雪緒。このバカに皮肉は通じねーぞ」

「それもそうでした」

素直にうなずいた雪緒は、先に歩きだした誠一の後を追つて廊下を歩きだした。

「おい、どういつ意味だ。ちやんと説明しや、雪緒、誠一！」

3人連れだつて歩くだけで、周囲は一気に大きくなりわめぐ。すれ違う生徒は壁にはりつき、遠くの生徒は指をさしていく。だがそんなこと、もう慣れっこだ。3人は生まれてからずっとこう扱いを受けてきた。

真と雪緒の組み合わせではお似合いのカップルに見えるが、常にその2人にはさまれている誠一の存在は明らかに異質なものであった。幼稚園から今までにいたるまで、何度も「誠一に脅されているのではないか」と尋ねられたかわからない。

そんな違和感の塊である3人組は、家3軒並んだお隣さん同士の幼馴染だ。それも生まれてこの方3人でいないことのほうが多い、というくらいの仲である。

それでも王子様とお姫様と魔王があててつないで仲良くしている図は、どうも世間一般に受け入れられないらしい。

人々は疑問に思う。なぜあの坂上誠一と一緒にいられるのか。坂上誠一はあの2人といいるのか。どう見たつて合いそうにない、とうか合うワケがない！しかし。

真に何を言おうにも、眼鏡を光らせ、「俺はアイツらがないとダメだからな！」としか返さない。

雪緒に何を尋ねても、つかみどころのない笑みを浮かべながら「私はたぶん、の人たちと離れられないと思つんですね」としか答えない。

誠一にはそもそも声をかける勇気ががない。

そこで出た結論が触らぬ神になんとやら、「黙つて見守るという名の放置」だ。

『城山学園謎の3人組』というそのままの異名までいただいてしまったが、そのおかげか今年雪緒が加わり3人組が再び結成され迎えた初冬、ようやく落ち着いた毎日を過ごすことができていた。すぐに気付いたことだろう。

周囲の人々はこの不可思議なトリオに興味を抱きつつも、誠一という大きな障害に阻まれて近寄ることができなかつた。だがしかし、あともう少しだけ近寄つてみようと思つていたら、行動してみたら、すぐに気付いたことだろう。

真と雪緒はどうしたつて誠一から離れないし、離れられない、ということに。

3人は削られた眉休みでさつと皿食をぐるぐる、いつものように4階の階段通路に移動した。ここはいつでも陽があたってポカポカするうえに、人がめったに来ないのだ。

「しかし、昨日は参ったな」

真は焼そばパンを片手にホットコーヒーをすすりながらしみじみと言つた。眼鏡の曇りは気にならないようだ。

「まったくだよ、誠一さん」

それに続くのは野菜ジュークスを飲む雪緒だ。2人の非難の目線は誠一に向かっていた。

重箱並のサイズの弁当箱を並べていた誠一は、ジロリと雪緒を見据える。

「俺のせいかよ」

「だつて、誠一さんが真さんの頭叩いて私の胸倉つかむから勘違いされたんじゃない」

「なんだとお？」

雪緒の小さな頭を驚嚇むと、誠一は眉間にシワをよせ口元をゆがませた凶悪な顔つきになつて言つた。

「おめーらがワガママ言つのが悪いんだろうが！ 雪緒はいきなり手袋にボンボンつけるつて言つし、真は出来上がりたばかりのマフラーに穴開けやがつて！ だからあんな時間に毛糸買いに行つたんだろうが！」

「だつて去年誠一さんが作つてくれたマフラーにはボンボンついてた。アレかわいかつたんだもん」

頭をがしがしこき回されながら主張する雪緒。からからシワ一トヘアが乱れに乱れてしまつている。

「しかたないだろ、気づいたらカバンの金具にひつかつてたんだ。それより俺はお前の顔が問題だと思つぞ。田つきとか」

そう言いつつ誠一の弁当に手を伸ばす真に、誠一の眉間のシワは深まるばかりだ。当然、その手が届くまえにたたき落とす。すると

それを見た雪緒は、今度は誠一の援護にまわった。

「ひどい、真さん。誠一さんはさすがに眉間のシワが深くて田元が

鋭いだけ」

「……雪緒、お前そんなモノで野菜とった氣になつてんじゃねーぞ。オラ、食え」

そう言つて差し出された彩り豊か、栄養満点の弁当箱に雪緒は素直に飛びついた。

「わーい！ サトイモの味噌煮食べたーい」

「何！？ するいど雪緒！ 誠一、俺にも弁当わけるー。」

「てめえはその炭水化物のコラボで十分だ！」

「ウグイス豆おいしい」

「雪緒、添え物ばかり食つてないで、ちやんと飯を食え。おじぎりちゃんと中身コンブにしてやつたから」

「誠一、お前雪緒にばっかり甘すきじゃないか？ 俺の卵焼きはどうした？」

「つるせえ、知るか！ そこにあんだろー！」

怒鳴りながらおにぎりを手渡し、卵焼きを突きだし、誠一はいつもながら忙しい。そのうちに誠一の肩に雪緒が寄りかかつってきた。

「お腹いっぱい。眠くなってきた」

「寝てんじゃねーぞ、雪緒。食つだけ食つてこつもボーッとしやがつて……」

雪緒はミステリアスではない。ただのボンヤリ少女だ。

「あ、真さんのボタン飛んでつた」

「ん？」

「ん？ じゃねえよ！ 無理やり引つ張つたらボタンもとれるわ、何やつてんだバカ野郎！」

「いや、袖をめぐりつと思つてな」

「なんでボタンをはずすつて発想がねーんだよ、お前の脳ノソはー。」

成績優秀・品行方正な生徒の鑑である真は、勉強はできても常識的なことに多少問題がある。

「つたく、お前らは……。真、ボタン取つてこい！」

誠一は眉間のシワをより深くしながらソーアイングセットを取りだした。恐喝・強盗・殺人などなど思いつく犯罪は一通りこなしていそうな顔をした、お母さん級の世話焼き苦労性。誠一はベッタリとまとわりつく幼馴染たちを長年面倒みてきたのである。

甘やかされた真と雪緒が今更誠一から離れるはずはない。そして誠一も、目を離したすきに何をやらかすかわからない2人が心配でたまらず、離れることができないでいる。

本当のことを見ているのは彼ら自身とそれぞれの両親くらいのものだ。

これは、そんな3人組を見守るお話である。

第1話 自己紹介を兼ねまして ある日の3人組（後書き）

まずは3人の紹介を兼ねたお話をから。
これから彼らの描く奇妙な正三角形を、ともに見守つていただける
と嬉しいです。

ご意見・感想をお待ちしています。

一言でもいただけると、本当に胸がいっぱいになるんです。
よろしくお願ひします。

第2話 ある朝の3人組

冬の空は薄い青だ。

天気はいいが、まだ空氣があたたまつていない。朝の7時を過ぎて、閑静な住宅街はようやく動き出そうとしていた。
せまい土地を最大限に利用しようと考えられた造りの家は、三つ子のように三軒ちょこんと並んでいた。そのうちの一軒から出てきた真は、ピンボーン、と隣の家のチャイムを鳴らし、返事が聞こえる前にさらに隣の家の前に移動した。またチャイムを鳴らす。
これが真の朝の日課だ。

「おはよー、誠一！」

「……おう」

のつそりと出てきたのは誠一だ。眠りの浅い誠一にとつて、朝日は天敵だ。目元の筋肉がひきつり、凶悪な顔がより凄みを増していった。

「相変わらずのひどい顔だな！」

「うるせえよ、お前は相変わらずムカつくほどイイ笑顔だな」

「当たり前だ、早寝早起きは基本だからな」

嫌味も通じず胸をはる真に、誠一は重い頭が余計に重くなるのを感じた。思わずうなだれたとき、誠一のわき腹に何かがトスンとぶつかった。

「お、はよー」ざこまプス

……」

眠りは深いが何時間でも眠つていい雪緒だ。なんとか玄関を出てきたのはいいが、誠一にぶつかつたまま寝息を立て始めた。その目は完全に閉じられている。

「おはよつ。起きろ、雪緒。朝食は食べたか」「真の問いかけにも答えない。

雪緒の首根っこをつかんで立たせながら、誠一は髪の乱れを整えてやつた。やわらかく癖のない雪緒の髪は、手櫛ですりてやるだけで素直にまとまる。

「ん……」

雪緒が右手に持っていたゼリー飲料を真に見せると、のろのろとした動きでそれを自分の口にあてがつた。

「いい加減ブドウ味飽きた……」

「ゼリーではなく米を食べればいいだろ?」「うう

まさに正論であるが、眞の言葉に雪緒は首を横に振る。

「食べる時間があるなら寝ていい……」

雪緒のいきたなさは筋がね入りだ。雪緒の部屋には田舎まし時計3個が常備されているが、雪緒を完全に田舎めでせるのはできずにはいる。

「まつたく、しかたないヤツだな」

眞は苦笑を洩らすと、雪緒の左腕をとった。眞一はもの言いたげな視線を真に向けるが、何も言わずに雪緒の右腕を同じよにつかむ。そしてそのまま雪緒をずるずるとひきずつて道を歩き出した。

小柄な雪緒が背の高い2人に連れて行かれる様は、まさに「宇宙人捕獲絵図」である。

だが、近所の奥様方や犬の散歩をしている老人方から不審な目で見られる事はない。

これも毎朝の風景の一部となっていたからだ。

「相変わらず起きないな、雪緒

眞は感心したように言った。そして眼鏡を光らせながら少しだけ上にある眞一の顔を見た。それに気付き、眞一は口元をひくつかせる。

「眞一、俺は思つたんだが」

「言ひな。聞きたくない」

「朝、俺が『イツをランニングに誘ひのせぢだらう』

「やめろ」

眞の提案を、誠一は間髪いれずたたき落とした。

「なんでだ！ 健康にもいいし、雪緒は朝食をしつかり食べられる。いいじゃないか」

「……お前、朝何時に起きて何キロ走ってる？」

「4時に起きて15キロ走つてこる」

「付き合えるか！」

勉強もできるしスポーツも得意な眞は、校内では文武両道を地でいつているように評価されている。しかし眞実は、己を鍛えるということに妄執ともいえる情熱をそそいでいる体力バカだ。

「そうか？ 雪緒も案外体力があるから、少しずつ慣れさせば……」

「慣れる前に倒れるぞ」

「それは困るな」

眞はしづしづと言つた様子で引き下がつた。だが、またすぐに立ち直る。

「なら、こうのはどうだらう」「ひづ」

「お前のアイディアは何一つ聞きたくねえんだよ！」

「雪緒は正攻法では起きないことは証明済みだ。なら、起こす」とではなく運搬法を考えよう

眞の耳は器用に誠一の訴えをスルーする。眞は雪緒の腰をがつりとつかむと、犬猫を扱つかの如くひょいと持ち上げ、肩に担いだ。

「こうやって運ぶというのは」

「ぶつ……」

雪緒の顔面が勢いよく眞の背中にぶつかる。

「ん？」

「鼻つぶれんだろ！ せめて抱っこか背負つかにしろー。つていうか運搬つて言うな！」

誠一はあわてて考えなしの幼馴染から雪緒を取り返す。

「甘やかしすぎるのはどうかと思つが」

「てめえのは虐待なんだよ！」

悲しいことであるが、やはりコイツは頭のネジが何本かぶつ飛んでいる。誠一はそう思わずにはいられない。

「ん、ん」

「お、効果があつたじゃないか。雪緒が起きたぞ、誠一」

「さつきのは運搬手段つってただろうがつ。おい雪緒、平氣か」
さすがの騒ぎに雪緒はむずがつて声を上げた。誠一は真に変わり、雪緒をあやすようにゆすりながら胸に抱いてやる。

小さな鼻先が少しだけ赤くなっているような気がするのは、やはり顔面に受けた衝撃のせいか。こんななんでも一応女の子、と誠一が青くなつていると、雪緒はまつげを震わせてまぶたを開けた。

「……つねにやくて眠れないんですけど……」

「……」

誠一は無言で雪緒を下ろすと、右手で雪緒の首根っこをひつ込み、左手で真の頭蓋を握りしめながら歩き出した。

「あ、ちよ、誠一さん？ 私起きました、起きましたよー」「ぐあああああ、待て、誠一！ これは痛い、かなり痛いぞー」「もういい。お前らに付き合つてたらいつまで経つても学校につかねー。このまま行く」

誠一は宣言通り、城山学園高等部の校門をくぐるまで2人から手を離さなかつた。真と雪緒の悲鳴がBGMだ。

毎朝こんなことをやつているから『謎の3人組』扱いされていることに、本人たちは気づいているのかいないのか。

第2話 ある朝の3人組（後書き）

第2話を読んでいただき、ありがとうございます！

3人組はいかがでしょうか？

淡々と過ごしながら変化を迎える彼らを、どうか見守つてやってください。

ご意見・感想をお待ちしています！

第3話 ある午後の3人組

伏せたまつげが物憂げな影をつくり、青白いともいえる肌とあいまって無機質な印象を与えていた。熱の感じられない表情が、それを余計に増長させていた。

だがぽてりと赤い唇が、彼女が人形でない証となつて奇妙な色香をかもしだしていた。一部の乱れもなく城山学園高等部の女子制服に身を包んだその立ち姿は、愛しい者に手折られるのを待つ可憐で儂い一輪のスイセンのようである。触ると消える儂い幻のような、それでも手をのばさずにはいられないような、淡い存在。

雪緒がかわいらしいのは周知の事実だ。真も誠一も、とつぐの昔から知っている。

だが、淡い幻どころか濃すぎる実態を持つていることも2人はよく知っていた。

「しまつたな、こんなに混むとは思わなかつた」

真は両手に持つたドリンクカップをしつかりと持ち直した。右は自分のホットコーヒー、左は雪緒の紅茶。どちらも人にぶつかっこぼしたら大惨事になる。

「平日だつてのに、ヒマなもんだ」

「俺らも似たようなもんだろうが」

自分用のコーヒーとバケツサイズのポップコーンカップを持った誠一は、宇宙船の内部のような光の飛び交う薄暗い映画館のロビーを見渡した。

チケット売り場と売店前は長い行列ができている。そこからようやく抜け出した2人は、ほっと一息ついたところであった。

定例職員会議のため午前中だけで授業が終わった城山学園高等部の学生たちは、一斉に街へ飛び出した。

普段は何もせざだらだらと過ごすことが多い3人であるが、出無精代表のような雪緒が珍しく「見たい映画がある」と言い出したのだ。それならば、と電車で数駅離れた街へ繰り出してみれば、平日の昼間にも関わらず映画館は人でにぎわっていた。

飲み物を買いに行つただけなのに、思いのほか時間をとられてしまった。

「雪緒、じれて動き回つて迷子になつていかないだろうか」

「不吉なこと言つてんじゃねーよ」

雪緒は女子の平均身長からみても小柄だ。人並み以上に体格の良い誠一からすれば、つぶれても仕方のないサイズに見える。何も考えていない真の発言とはわかつていながら、誠一は心配になつてきた。

「おとなしくしてろとは言つておいてが……」

迷子を心配する母親の如く、誠一は雪緒を探す。そして言いつけ通り、映画予告が流れる大型テレビ画面の横に立つ雪緒の姿を見つけてホツと胸をなでおろした。

だが、誠一はその隣にいる余計なものまで見てしまった。

見知らぬ若い男が雪緒の手をつかんでいるのだ。そしてそれをからかうように見ている男が3人。

雪緒はいつもと変わらぬ冷めた顔で、目元一つ、口元一つ動かさない。これでは本気で嫌がつているとは伝わりにくいだろう。だが、内心かなり苛立つていることが誠一にはよくわかる。ふりほどこうと細い腕を左右に振つていて、男はにやけた笑みを浮かべながらなおも雪緒に話しかけていた。男同士で来ていたところ、1人たたずむ雪緒に目をつけたのだろう。

通り過ぎる人々は多いが、誰も助けようとしない。

「あの野郎……」

誠一は静かに怒りを吐き出した。

「雪緒！」

真もよひやく事態に気づいたらしく、眼鏡の奥の瞳を険しくさせた。

それを確認した誠一は、真に「行くぞ」とアイコンタクトを取ろうとした。両手の荷物を放り投げ、ダッシュのように飛び蹴りでも食らわせりやあの命知らずも退散するだらう。誠一は手に持つているのが熱々のコーヒーとぶちまけると大変面倒なポップコーンであることも忘れた。

だが、しかし。真は誠一の視線に気づきながらもそれを無視した。そしてあらうことか、

「外側に立つて手を引け！」
と叫んだのだ。

こいつ何言ってやがる、本気で頭おかしくなったか？ と誠一が思つたその瞬間だ。

雪緒はハッと顔をこちらに向けると、すぐさま行動に移した。流れるように鮮やかな動きだつた。相手の左手によつて右手首をつかまれていた雪緒は、男の体の外に向かつて一歩踏み出し体を反転させた。その体制をとることで男は手首を返される形になり、力が入らなくなるのだ。そして雪緒はするじと手を引き抜くと、そのまま男のわき腹に裏拳を叩きつける。ぐえっと顔をひきつらせて体を半分に折つたところを、雪緒は手のひらで押し上げるように相手の顎を下から突いた。

男がひっくりかえる瞬間が、まるでスローモーションのように見える。

雪緒は哀れな敗者を冷え冷えとした目で見下ろした。

「よおっし、よくやつたぞ……」

「何やつてんだお前はアあああ……」

カツプを持ったままガツツポーズをつくる真をしり田に、誠一はポップコーンをまきちらしながら突進した。小さな飲み口から「一ヒーがこぼれ手を濡らすが、熱さなど感じていられない。その勢いに、他の客たちは一斉に飛びのいて誠一の道を作る。

「おい口ラ雪緒！　お前今何やった！！」

「あ、誠一さん。お帰りなさい」

「おう、待たせて悪かった……じゃねえつつの！」

誠一が作った人波の切れ目を悠々と歩いてきた真は、誠一の怒鳴り声を無視して晴れやかな笑みを浮かべた。

「雪緒、さっきの良かつたぞ！　練習した甲斐があつたな」「あんなのどこで使うのかと思つたら、案外役に立つたね」ぐつと親指を立て会う2人を、誠一は苦々しい思いで睨みつける。「てめーだな、真！？」雪緒に妙なこと教えたのは！

「妙なことじやない、ちょっとした護身術だ」

真は何を言つてるんだお前は、という目で誠一を見た。話にならん、こいつは何にもわかっちゃいない！　先ほど自分は飛び蹴りをしようとしたことなどすっかり棚にあげ、誠一は幼馴染2人の奇行に首を横に振った。

「あ、あんたらなア、そこの女の子とどういつ関係かしらないが、いつたいなんなんだ！？　非常識にもほどが……！」

ようやくショックから回復したのか、わき腹を抑えながら男は顔を上げながら抗議してくる。固まっていた仲間の3人も彼に続いて向かつてこようとしたが、その威勢の良さも長くは続かない。

それもそのはずだ。言いようもない怒りにかられ、薄暗い照明の下でにぶく光る誠一の目に射抜かれたのだから。

「…………お、お連れさまにたいへん失礼しました……」

「…………わかりやいいんだよ」

それだけ言つてさつさと退散した男たちを背中で送り、誠一は少しだけ力サの減ったポップコーンを雪緒に渡す。

「雪緒、いつあんなの習つたんだよ」

「」の前俺が教えた。こぞとこつと身を守る」とへりこできたほう
うがいい」

真が満足げに鼻をならした。最近真の部屋によく雪緒が出入りすると思つたら、案の定ろくでもないことをしていたらしい。誠一は自分の監視が甘かつたことを若干後悔した。

だが、と誠一は自分の腹あたりにある雪緒を見下ろした。

さつそくポップコーンをほおばる今の雪緒は普段よりずいぶんと幼く、危なげに見える。普段は近寄りがたい雰囲気をしていくぐせに、妙な連中を引き付けやすい少女であることは事実だ。真の言うとおり、身を守る術心得ている分にはかまわない。だが、誠一の予想斜め上を走ってくれるのがこの幼馴染だ。

「だからってフィニッシュュまではいらねーだろ、真オー！」

「雪緒、手は痛くないか？」

「平氣」

「聞け！」

お前らしい加減に怒るぞ、と誠一が怒鳴りつけようとしたとき、2人は示し合わせたかのようにそろつて口に指をあて「しーっ！」と言つた。そしてわざとらしく周囲を見回す。

「つるさくしちゃうと迷惑になるよ、誠一さん」

「そろそろ時間だ。3番シアターだつたな、行くぞ誠一

「お前らなア……」

「」の騒ぎで今更「静かにしろ」も何もない。この場の視線は全て3人に注がれている。にぎやかだった空間にぽつかりとした穴があり、今ではこちらを指さしながらのひそひそ声ばかりが聞こえてくる。

「はい、誠一さん」

ギリギリと歯ぎしりをする誠一の口元に、雪緒は細い指先をあてがつた。ポップコーンがつままれている。

「……」

それを無言で口で受け取ると、雪緒は口角をほんの少し上げるだけの笑みを浮かべて見せた。それは雪緒にとっては満面の笑みに等しい。表情筋のあまり発達していないと思われる小さな顔であるが、内面の喜怒哀楽は激しい。

雪緒はこれから見る映画にほしゃいでいる。真もそれをわかつている。

誠一はキャラメルのフレーバーがついたポップコーンを苛立ちとともに飲み込み、雪緒の背中を押しつつ真の後に続いたのだった。

第3話 ある午後の3人組（後書き）

だらだらと変わり映えのない日々をおくる3人ですが、次回から少しずつ変化が訪れます。
どうぞお付き合いください。

ご意見・感想をお待ちしています！

第4話 生徒会室での3人組

「大変だね！ こんな仕事、放課後にやらなくちゃいけないなんて……」

やわらかい響きの女の子の声。少し震えているのがかわいらしい。しかし、それに答える男の声はなんとも無愛想である。

「たいした作業ではない。それぞれの書類に署名して生徒会印を押すだけだからな」

「あの……手伝おうか？」

「この仕事は生徒会の人間しかやってはいけないことになっている。君は違うだろ？」「

「そっか、ごめん……。でも、書類を分けたりとか渡すとかできるし！ 効率あがるよ？」

「今やっているのが俺が一番やりやすい方法だから、余計なことはしなくていい

「そ、そっか……。『めんなさい』

女の子はしゅんとしおれたように黙り込み、猛烈なスピードで紙の束をめくる音だけが聞こえてきた。

「真さんつてバカですね」

「真はバカだな」

雪緒と誠一は、給湯室の扉のそばにうずくまって耳をコップに押し当てていた。そんなことをしなくても十分に隣の会話は聞こえるのだが、これは気分を出すための小道具だ。扉をはさんだ隣の部屋は生徒会室であるが、今そこは生徒会副会長である真と、彼と同学

年らしい女生徒の2人きり。

人気のない生徒会室は、対真用の定番の告白スポットである。常識こそないが根は眞面目な眞は、誰もやりたがらない事務作業を一手に引き受け、時折こうして1人で居残っている。そのときこそ、真に想いを伝える絶好の機会なのだそうだ。

「真さん、顔は綺麗だから」

「成績はトップクラス、運動神経も抜群だしな」

こそこのと耳打ちしあいながら、2人はやれやれと肩をすくめた。

生徒会室には隣接して給湯室があり、そこにはちょっとしたお茶菓子と飲み物が常備されている。3人組の数少ない理解者の1人である城山学園の女傑・生徒会長の一本松清香は、眞の仕事に対する報酬として空いている時間に限り生徒会室を開放してくれていた。今日も眞をからかいつつも2人でティータイムを楽しもうとしたのだが、予期せぬお客様が訪れたというわけだ。「宮田くん、ちょっとといいかな?」という控えめなノックを合図に給湯室に隠れることにはもう慣れただ。

今まで幾度となく同じシチュエーションで、取り付く島もない眞に撃沈していくた女生徒達を目に(正確には耳だが)してきた。これでまた真なんかに泣かされる女性が増ええるのか、と雪緒は嘆かずにはいられない。

しかし座つて紅茶を飲みたいのではやく諦めてくれないか、とも思つてしまふのが正直なところである。

「あの野郎がとんでもないバカだつてことにどうして気付かねーんだか」

「パツと見ただけじゃ伝わらないんだね」

眞は鼻筋の通つた優しい顔立ちをしている。線が細い割に筋肉質な体格はボクサーのそれにも似て、腹が割れているというのが本人の自慢である。勉学も毎日の予習復習は学生として当然のこと、と真顔で言つてのける。

見た目はまさに眼鏡をかけた王子様だ。

だが中身は王子には程遠く、眞面目も行き過ぎれば短所にしかならぬことを証明してしまつてゐる悲しい男だ。

彼女たちが何のためにわざわざ用もない生徒会室に訪れているのかいい加減わかつてほしいが、眞にはまつたく通じていない。だから「俺たちがいることは絶対に言つな」と毎回言い含めなくてはいけなかつた。これだけ鈍感な男、どこがいいのだろうか。

誠一と雪緒はため息をつきそになつたが、氣を取り直したような女子の子の

「じゃあ、お茶でも淹れてあげる!」

といふ華やいだ声にビクリと体がはねた。

せまい給湯室だ、流しの下に雪緒は隠れられても、誠一が入るようなスペースがあるはずはない。窓から飛び降りようにもここは3階だ。

どこへ身を隠そう、とあわてる2人を安心させるかのように、落ち着いた眞の声が響いた。

「いや、結構だ。それより申し訳ないが、君の左隣にある棚から青いファイルをとつてもらえないか」

「うん、わかつた!」

頼まれたことがよほど嬉しかったのか、女子の子がパタパタと足取り軽く動く気配が伝わつてくる。

真にしてはうまいアドリブだ、と雪緒はほつと息をついた。窓のサンに足をかけていた誠一もこわいと戻つてくる。

「あ、これ花山先生の字だね」

「そうだな」

「花山先生つて字は汚いけど、生物の授業わかりやすくておもしろいよね」

「ああ、俺もそう思う。この前の人體については特に……」
急に話がはずんだ扉の向こう側に、今度は呆れではなく驚きで2人は顔を見合させた。

「すうい。真さんが楽しそう」

「まあ、アレは筋肉の話題だからかもしだれねーが……」

話の内容はイマイチだが、チヨイスはまさに真好みだといえる。
思わぬ真の好反応に、誠一と雪緒はコップを放りだして直接扉に耳
をあてた。

「ふふ、そういうえば飯田先生も字は特徴的だよねー」

「言えてるな。俺もノートをとるのに苦労する」

「えー、富田君が！？ でもすういぐキレイで見やすいノートだつ
て評判だよ？」

「そうだろうか」

「うん、今度テスト前に見せてもらおうかな」

しおれかけたところで水を与えられた花は、再び咲きほころんだ。
色恋というものは複雑であるが、他人のを見ているとこれほど滑稽な
ものはない、と誠一は舌打ちしたい気持ちになつた。

雪緒は誠一とは違い、立ち直りの早さに素直に感心している。

「ねえ、誠一さん。恋する女の子って強いね」

「ああ。あれだけの会話であそこまではしゃぐんだからな」とはいえ、実際真に対しこれだけ会話が続いた例はマレである。
今までにないこと起きるかもしれない、と野次馬根性が騒ぎだし
てきた。

だが、しかし。

「教わっている教師が同じなようだな。君はどこのクラスだ？」

「……あたし、富田君と同じクラスだけど」

春のよしにぽわぽわと温かかった空気が、一瞬で凍りつく。

「あ、すまない、目に入つていなかつたようで……」

「もういい。あたし、帰るね」

冷え切つた声音がしたかと思つと、いくらも経たぬうちにビジャ
ン！と大きな音を立てて扉が閉められた。

「なんだつたんだ、一体。おい、誠一、雪緒。なんだかわからんが
彼女はもう帰った。出てきて平氣だぞ」

給湯室の扉を開けて2人を呼ぶ真の顔には、罪悪感も後悔も反省
も、なにもない。

「……」

「……」

誠一と雪緒は、今度こそ大きなため息をついた。
「やつぱり真さんつて」
「バカだな……」
「な、なんだいきなりお前ひーー。」

第4話 生徒会室での3人組（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

第5話 帰り道の3人組

さむいさむい、と身をすくめながらも、放課後の解放感に生徒たちは浮かれながら校門を出ていく。そんな中、注目を集めながら歩いてくる雪緒と真の姿があった。

雪緒と真は2人で帰宅の途についていた。誠一は用事がある、と足早に先に帰ってしまったのだ。強面の誠一が抜けると2人はまさに美男美女の組み合わせ、いつもとは違つた意味で人目を引くのである。

「うう、寒い……。なんだって女子高生はナマ足という苦行に耐えなければならないのか」

「なんで耐える必要があるんだ。女子制服の規定ではタイツとかあるだろ?」「うう……」

「そもそもいかないのが女子高生の悲しいサダメ」

「腹巻はいいのにか」

「ボディウォーマーって言つて。おなかは見えないからいいの」「女子高生というのはわからんな……」

高校生らしからぬ落ち着きをもつて真剣な顔をして話しこんでいる2人だが、内容はいつも中身のないものばかりだ。雪緒は誠一お手製の真っ白なマフラーで口元まで覆い、ふるつと体をふるわせた。

「うう……」

「できれば俺のズボンをはかせてやりたいが……」

「絶対やめてください」

「当たり前だ。俺も路上で下半身パンツのみになる気はない」

雪緒は大真面目な真をじつとりと睨みつけた。正気を疑う発言だが、真ならば冗談になりかねないから怖いのだ。

「だが、寒いなら我慢するんじゃない。風邪をひくと誠一が怒るぞ」「そう諭され、雪緒の脳裏に強面の顔をよりすさまじいものにしながら怒る誠一の姿がうかんだ。きっとたまご粥を作るための菜箸を片手に「体調管理もできねーのか!」と怒鳴ることだらう。「気をつけよ!」と……。あ、とにかくなんで今田は誠一さんいなさいの?」

「誠一なら、呼び出しを受けたよ!」

「ああ……」

雪緒は頭を伏せ、手袋（これも誠一お手製である）の毛糸のボンボンをいじった。その仕草を見て、真は雪緒の頭を自分の胸元に引きよせた。

驚くべきことではあるが、この地域ではいまだに「高校の××ってヤツが強いらし!」、「負けてらんねえ、アイサツしに行つてやろ!」、「ぜ」という会話が成立している。城山学園は比較的おとなしい学校ではあるが、その分誠一の存在は際立つてしまっていた。おかげで時折、他の高校の柄の悪い連中から「呼び出し」を受けてしまうのだ。

「大丈夫だ。あいつは負けない」

「それでも、万が一つてことがあるでしょ」

「その方が一のために俺がいるんだ」

「終わつてからしか行かないくせに」

「俺が行くのはあいつが負けないよ!とするためじゃない。あいつの敵討のためだ」

「負けるの待つてるワケ?」

「負けない。だから俺の出番はない」

「意味わかんない」

まったく顔色を変えないが、雪緒がへそを曲げたことをすぐさま察知した真は苦笑いを浮かべた。

「雪緒。そうすねるな。誠一がまた困るぞ」

「すねてないよ」

「嘘をつけ。俺にはすぐわかるぞ」

真は深緑色の手袋をした手で雪緒のほほをくすぐった。

「そろそろ終わっただろう。お土産を買って、迎えに行こう

「……うん」

誠一はポリバケツの上に置いておいたカバンとコートを取り上げた。隣の怪しげな店の通気口から流れる臭いが移ってしまっていいかが気がかりだった。

吐く息は白いものの、暴れたおかげで体は熱い。誠一はうめき声をあげて地面に這いつぶばつている少年たちを一瞥し、その場をあとにした。鼻筋を狙つて鼻血を出させるだけで、大抵の連中の戦意は喪失する。今回も同じで、ここに倒れている人数よりも逃げて行った人数のほうが多いかった。

案外早く終わつたな、と誠一は首の骨を鳴らした。怪我はない。悲しいことにケンカダコができた右拳は、多少の衝撃では痛みも感じない。

夜にこそ華やぐ店が並ぶ裏通りのパーキングエリア。狭いうえに両側からのしかかるように生えたビルのおかげで日が当らない。昼間に通りかかる人間はほとんどいないし、城山学園からも適度に離れている。誠一は「呼び出し」に応える際にはいつも必ずこの場所を指名した。

細い道を大股で歩き、大通りに一歩踏み出したところで誠一は足をとめた。

幼馴染2人が並んで立っていたからだ。しかも、片方は大きな瞳に不満の色をにじませている。

「よう。今回もあつさり終わったみたいだな

「……おつ」

誠一は軽くうなづくが、あつさり終わるのはここまでだな、と心中で嘆息した。拳で片付く問題のなんと簡単なことか！

「誠一さん」

「なんだよ」

誠一は雪緒と視線を合わせない。

「肉まん。まだ温か~よ」

「……おひつ」

誠一は瞠目しながら、雪緒が差し出した紙袋を受け取った。開けたとたんに湯気がたちのぼり、なんとも食欲をそそる香りが鼻をくすぐった。

「雪緒。俺にもくれ。食べながら帰ろ~」

真が雪緒の背中を押す。そして誠一に向か、どうだと言わんばかりの得意げな笑みを向けてきた。

誠一はけつと口元をゆがめる。

誠一が丁寧に「呼び出し」に応えるのは、校門前で待ち伏せされるのが嫌だからだ。高くもない評判をさらに落とすことになるし、一方的に殴られるのも我慢できない。だったら素直に迎え撃つたほうが楽とこうものだ。

それに、と誠一は隣で自分の顔ほどもある肉まんをほおばる雪緒を見下ろした。

誠一には、何よりも守らなくてはいけないものがある。つかつに学園近くでからまれて、むざむざとソレを危険にさらすことはできなかつた。そして自分がその場を離れても、ソレのやばいことは信頼できる男がついてくる。だからこそ誠一は安心してあの場所で「呼び出し」を受けるのだ。

いつしか減るだろ~うと思っていた「呼び出し」の回数が一向に減らないことが誤算であつたが、そんなことはもういい。諦めた。

毎回毎回誠一を悩ませるのは、別のことだったのだが。

今回は真がうまくやつてくれたようだな。

誠一は内心ほつとしながら肉まんの最後のひとかけらを飲み込ん

だ。

そんな誠一の心を見透かしたようなタイミングで、雪緒はすかさず
「誠一さん、なんか脂っぽい変な二オイがするー」と露骨にそっぽを向いて見せた。『機嫌は完全にはなおっていないらしい。

「……悪かつたな」

雪緒は肉まんから顔を離し、じつと誠一を見つめた。
「あとで全身消臭スプレーかけてあげる」

「そりやどーも」

真は肉まんの湯気でくもつた眼鏡を拭きながら、素直ではない二人の幼馴染を見守っていた。

第5話 帰り道の3人組（後書き）

次回は新たな登場人物が加わり、お話が動いていく予定です。
ご意見・感想をお待ちしています。

第6話 3人組と乱入者

絶妙なバランスを保っていた正三角形。
それをいまさら打ち崩そうとする人間が入り込むとは、雪緒にも
真にも誠一にも、思いもつかないことだった。

「季節外れではあるが、『両親の都合で急きょ転入してきた大橋愛

梨さんだ』

「大橋愛梨です、よろしくお願ひします！仲良くしてください！」

クラス中の注目を受け、彼女は満面の笑みを浮かべてポニー テーブルを揺らした。

なんだか少女マンガの主人公のようだ、と雪緒は思った。
「空いている席に座りなさい」

「はい！」

大きな田はきらきらと輝き、細い手足はバネ仕掛けのように跳ねながら動く。愛梨は担任教師が指さした席、つまり雪緒の隣へとまっすぐに向かつてきた。

「よろしく！仲良くしてね」

愛梨は茶目つけたっぷりに言った。堂々としたものだ、と雪緒は感心してしまつ。

「よろしく」

雪緒が返事をすると、愛梨はきょとんと首をかしげた。

「具合悪いの？大丈夫？」

「……元気だけ」

いきなり何を言つのか、と雪緒まで首をかしげると、愛梨はにっこりと笑つた。

「よかつた！ 表情が暗いから病氣かと思つて心配しからやつた！」

「……そり」

仲良くなれないかも。雪緒は心の中でじつやうつぶやいた。

「ユツキーツ呼んでいい？ 雪緒ちゃんもいいたゞ、もつと碎けたカンジがほしいし。あ、あたしは愛梨でいいよ！」

「ねえ、トイレ一緒に行こうよー！」

「ユツキーマタ顔暗くなつてるよー、もうー！」

愛梨に悪気はない。彼女は心からの好意をもつて雪緒と仲良くしようとしていた。転校先で最初に話した相手なら、そつるのは至極当然といえる。雪緒もそれは理解していた。

それでも、なぜ自分は彼女を素直に受け入れる気になれないのか。

「大橋さん、私のことは有邊でいいよ」

「トイレなら教室を出て右に行けば、階段そばにあるよ」

「この顔はもともとだから」

雪緒のあまりに無愛想な返答に、教室中はひやひやしながら、しかし多大なる好奇心をもつて2人を見守っていた。

雪緒はもともとこの1-Aでは浮いていた。謎の3人組の1人といつももあるが、整いすぎて温度を感じさせない容貌がそれに拍車をかけていた。クラスメートと交流を持たないわけではないが、雪緒はいつもある程度の距離を置いた付き合いしかしていない。いや、許さないといったほうがいいかもしね。

今年度の1-Aが成立してからすでに9カ月がたとうとしている。だから多くのクラスメートたちは雪緒との付き合い方も慣れてきたところではあるが、愛梨のようにいきなりズカズカと踏み込んでいった人間はいなかつた。さて、雪緒はどうでるのか。そして愛梨はどう反応するのか。

愛梨がバツサリと斬られることは予想済みだつたが、ギャラリーの期待に応えるように、彼女はきょとんと大きな目をさらに大きく

丸くした後でまた笑つた。パツと太陽のように明るい笑顔だ。

「ユッキーってクールだね。顔も声もすつ“ぐくかわいいのに、中身はかつこいいんだー！ うらやましいな！」

おお、とひそやかにざわめく教室。これには雪緒のほうが驚いた。この子、全然めげない。

「ねえユッキー、お昼いつもどうしてるの？ 一緒に食べよ！」

しかし、この愛梨の発言にはさすがに教室が凍りついた。雪緒が真や誠一と昼食を共にしていることは周知の事実だったからだ。転校初日に誠一のような人間と顔を合わせるのは強烈すぎる。

「ごめんね、私、いつも一緒に食べている人たちがいるから」

雪緒はやんわりと言うが、愛梨は雪緒の手をぎゅっと握つて離さない。触れられた箇所から鳥肌が立ちそうだつた。

「あたしも入れてもらえないかなー、なんて？」

こてん、と小首をかしげて上目づかいに雪緒を見る愛梨。愛梨は格別美少女とは言えないが、小動物じみた愛きょうがあつた。口角がきゅっと上がつた口元が愛らしい。見るものを引き付け、おねだりを聞いてあげたくなるような魅力だ。

これが庇護欲というものが、と雪緒は冷静に愛梨を観察した。

「ねえ大橋さん、わたしたちと食べようよ」

「うん、有辺さんはこの通り、静かのが好きな人だからさ」

思わぬところで救いの手。

興味は尽きないが雪緒が困つてゐるとみて、クラスの女子が助け舟を出してくれた。雪緒が感謝の視線を向けると、彼女たちは恥ずかしげに頬を染めて雪緒に笑いかける。

妙なところでほのかな友情を感じた雪緒だが、愛梨は一筋縄でいく相手ではなかつた。

「えー？ なにそれ、変だよ！ なんだかそう言って距離置いてるほうがさみしいって」

愛梨は驚いたように口をぱちぱちとまたかせる。

「いや、校内にはちょっと危ない人とかもいるからさ……」

その危ない人のもとへ行こうとしている雪緒は、誰にもわからない苦笑いをもらす。

「危ない人？ 会つてみないとわかんないよ。大丈夫、大丈夫！」忠告もむなしく、愛梨は雪緒の手をぎゅっと握り直すと、もう片方の手で弁当を掲げて見せた。

「ね、ユッキー行こ？」

「……」

雪緒のほんのりとあたたまつた心が急速に冷えていく。

4階の階段そばは冬場は寒い。最近は空き教室にもぐりこんで弁当を広げている。

先に来ていた真と誠一は、ぽかんと口を開けて愛梨を見つめた。
「ここにちは、今日転入してきた大橋愛梨です！ お邪魔します」

「そういうコトです」

雪緒はもうどうでもなれ、と愛梨を真と誠一に任せることにした。

「わーー、センパイ、ですか？」

制服の襟元について学年を示すバッジを見て、愛梨は尋ねた。臆した様子もなく愛梨は2人に歩み寄る。

真もどうしていいのかわからないようで、雪緒と愛梨を交互に見ては戸惑っていた。誠一に至っては何も言わず、弁当を並べている。一種の現実逃避だ。

今までこの3人の集まりに他人を入れたことはなかつた。たいていの人間は誠一に恐れをなして近寄つてこないからだ。

誠一がだんまりを決め込んだことを察した真は、とりあえず、と口を開いた。

「あ、あ、 、そうだ。2年の宮田真」

「よろしくお願ひします！」

「ああ」

「それだけ言つと、真は素早くそっぽを向いてしまつ。

愛梨は頬を赤く染め、小ちく雪緒に「すつじくかつこいせんぱイだね！」と耳打ちした。素直でわかりやすい子だ、と雪緒は思う。さてもう一人はどうでるか、と雪緒が誠一をうかがつていた横で、愛梨は朗らかに声をかけた。

「あの、そちらのセンパイのお名前は？」

「あア？」

無視していた存在にまさか話しかけられるとは思つていなかつたらしい誠一は、思い切り顔をしかめてみせた。怒つてゐるわけではない、驚いてゐるのだ。

「お伺いしてもいいですか」

にじりと誠一に笑いかける愛梨に、真と雪緒は目をむいた。

誠一の、あの顔を見て。
ひるむでもなく、おびえるでもなく。
笑いかけるなど。

「あ、ああ……。2年の坂上だ」

「坂上センパイ！ よろしくお願ひしますね。わ、すつじこ豪華なお弁当！ センパイのお母さんが作つたんですか！？」

「……俺だ」

愛梨はわあ！と歎声をあげて重箱をのぞきこむ。

「すうじーい！ お料理上手なんですね。あたし全然ダメだ！ つらやましいなア、コツキーいつもこんなおいしそうなお弁当食べてるのー？」

「ゆ、ゆつきー！？」

「あ、コツキーって呼んでるんですね。ね！」

そう言って雪緒を振り返る愛梨は、寒びこなはあまりに不釣り合いでつた。

「うつそ、愛梨ちゃん、あのサカガミセイイチどじ飯食べたの！？」
「うん！ すっごく優しい人だつたよ！ ご飯もおいしいかつたし。
へへ、ちょっと分けてもらつちゃんとたんだー。宮田センパイはかつ
こいいし、コツキーはかわいいし、なんだか豪華なお昼休みだつた」
放課後、他の生徒と楽しげに話しこむ愛梨の姿は、雪緒よりもよ
っぽどクラスに溶け込んでいた。

明るくて前向き、ちょっとおしゃべり。素直で、元気がよくて、
人を色眼鏡で見ずに自分で見極めようとする。

自分に自信がある証拠だ。

雪緒にはとてもマネできない、春の太陽に似た笑顔。

雪緒は戦慄した。

そして同時に、大橋愛梨を絶対に許してはいけない敵と認識した。

雪緒にとつて、何よりも完璧であつた正三角形に訪れた変化を自
覚した瞬間だつた。

第6話 3人組と乱入者（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

第7話 ある日の真と雪緒

購買のパンと誠一の弁当で腹を満たした後は、眠りたがる雪緒の相手をして食休み。それが真の昼休みの過ごし方だった。
しかしある日を境に、昼休みは最も落ち着かない時間になってしまった。

「富田センパイって生徒会の副会長だったんですね！ すごいなア、頭もいいし、運動神経も抜群だつて聞きましたよ！」

「あ、あア……、ありがとづ」

真は珍しく言葉につかえながら、なんとか礼だけ言った。しかし、だからなんだというのだ、という思いがこみ上げて口元がゆがみそ うになる。

大橋愛梨という少女は、雪緒のクラスに転入してきた女生徒だ。最初は「お邪魔します」と雪緒の後について来たのだが、今では雪緒を引っ張つてくる勢いだ。愛梨は物おじしない性格らしく、ぐいぐいと突っ込んでは自分の居場所を確保していく。無邪気な満面の笑みは、拒絶や嫌悪といったあらゆる負の感情を跳ね返すばかりでなく、避けようとしたとたんこちらに罪悪感をもたらす。ある意味で最強無敵だ。

おかげで、真はまったく落ち着かない昼休みを過ごすこととなつていた。

「富田センパイって何かスポーツやってるんですか？」
「いや。体を鍛えることは好きだが」
「おおー。見た目細いのに、実は筋肉がつしりつて感じですもんね
」

愛梨はおどけて細い腕で力コブを作つてみせた。

「ごまかした」

愛梨は人をよく見る。何を好んでいるか、何を嫌っているか、そういうものを見透かしたように相手の心に入つてこようとするのだ。

「ジギーといたの？ あこの『れん草の胡麻糰』

「あつがとづ

雪緒は、愛梨が差し出した誠一の弁当から素直にほうれん草をつまんだ。だがそんな態度とは裏腹に、雪緒からは冷え切った空気がしか流れこない。愛梨も気づいているからこそいろいろと気を遣つているのだろうが、効果はない。愛梨は困ったように笑うだけだ。そして次、とばかりに愛梨は誠一のほうへ向きなおった。

「坂上センパイ、このキャラバンのつどどうやって作るんですか？」

「タマ？」

だ
と
8
枚
く
一
だ
一

誠一は得意分野の料理について珍しく饒舌に語っている。眉間にシワがうすくなっているのは氣のせいではないだろう。愛梨はうんうん、と身を乗り出して話を聞いていた。真の位置からは、体の大きな誠一が小柄な愛梨を受け止めているように見えた。

隣の雪緒が発する冷氣か一層冷えたのを感じ取り、真はやれやれとため息をつく。愛梨が来るようになつてから雪緒はすこぶる機嫌が悪い。

「雪緒」

とんとん、と肩をつつき、振り向いた雪緒の口に卵焼きを突っ込
んだ。

「……」

もじもじと咀嚼しながら、雪緒は眞の皿をじつとりと見返した。

「わ、もしかして、富田センパイとコツキーって付き合ってるの…？」

愛梨のはしゃいだ高い声が室内に響く。

「何？」

「違うけど」

聞き返す眞を無視し、雪緒は口の中のものを飲み込んで返答した。
「え、違うのー？ お似合いだと思ったのに。ね、坂上センパイ？」
今まで何度も言われたことだが、本人たちを前にして、誠一を前にしてここまでハツキリと言つてのけた人はいなかつた。

残念そうな愛梨の背後にある、誠一の目を眞は見た。いつもどおりの重みと淒みのある視線だ。眞は目をそらさずに言つた。
「彼女のわけない」

そう、雪緒が俺の彼女のはずはない。

眞は自分でハツキリと言いながら、心の中で確認作業を行つていた。俺と雪緒は幼馴染であつて、恋人のように男女として関わったことはない。

雪緒はそもそも、そういうつた恋愛事に興味をもつてゐるのだろうか。雪緒は自分と誠一以外の他人には通じない無表情を維持しており、まともな友好関係が作れてゐるのか、といつことにすら眞は疑問を抱いている。

雪緒のことは愛しいと思つ。誠一にさえ言つたことはないが、雪緒の微笑みにドキリとさせられたことは一度や一度ではない。

だが、雪緒は眞の恋人ではない。

雪緒が眞の恋人でないと同じように。

雪緒は今日もタンクトップにジャージといつ、気の抜け切った格好で真の部屋に訪れていた。親ぐるみで気心の知れた仲であるから、家に来るのも顔パスだ。

「いいなあ、コレ。私も買おうかな」

と以前そう言いながらパンチボールで遊んでした雪緒に、「俺のを貸してやるからいつでも来い」と言つたのは真だ。

今日もいい音を立てながら遊ぶ雪緒を、真はベッドに座りながら眺めていた。基本的に後悔というものを知らない真であるが、今回ばかりは軽々しく雪緒を自室に入れる許可したことを悔やんでいた。

拳を出すのと戻すスピードが同じ、軌道もブレがない。理想的なフォームだ。ボクシング部に入つていらないのが本当にもつたいない逸材。だがやはり体が開きがちになるのは教える自分が我流のせいだからだろうか。そういうた冷静な分析を行ながらも、真は頭の一部が少し熱をもつていていた。

軽いフットワークでしなやかに動く体。首筋を伝う一筋の汗。普段は真っ白な、少し色づいたほほ。下唇がぼてりと赤い、口元からもれる乱れた呼吸。

真が男だとわかっているのかいないのか、雪緒は無防備に軽装で来る。運動するのだから当然と言えば当然。しかしそれにしても警戒心がなさすぎる。

これを信頼と呼ぶか、なめられているのか。

誠一も最初はとめていたが、今では呆れながらの黙認状態だ。しかしどうしてもっと強く止めてくれなかつたのか、とお角違ひな恨みを抱かずにはいられない。8畳の部屋は十分広かつたというのに、なぜ今になつてこつも狭く感じるのか。

もし今。

俺がこいつに触れたとしたら。

雪緒はどう思つだらけ。

誠一は？

「は
」

急にこじらを見た雪緒に、真は思考停止におちいった。

「真さん、何にも思わないの」

「何がだ」

体が震えそうになるのをなんとかこらえる。

「誠一さんのこと…」

なんというタイミングで誠一の名前を出すのが、こいつは。真はこめかみに銃口をつけられたような気持ちになった。「大橋愛梨さんをどうにかしないと、誠一さんが取られる」雪緒は乱れた呼吸を整えながら、吐き捨てるように言った。

「大橋さんみたいな人は危険だよ」

「危険？」

「今まであんな風に誠一さんに接する人はいなかつた」

雪緒はグローブをはずし、いらだたしげに真にむかって投げた。「誠一さんはもともと世話焼き体质。ああいつた子は気にせずにはいられないはず。自分におびえたりしないってわかつたらなおさらだ。 そうしたら…」

「そうしたら？」

「誠一さん、私たちじゃなくてあの子ばかりかまうようになるよ。大橋さんのための手袋、大橋さんのためのお弁当、大橋さんのためのあれやこれや……」

「そうだろうか」

真は必死な様子の雪緒に首をかしげてみせた。今までどんなに迷惑をかけても離れなかつた誠一だ。今更大橋愛梨が出てきたところで、自分たちの関係がどうにかなるとは思えなかつた。

「真さんはノンキなんだから。よく考えてよ。誠一さんにベッタリで面倒みてもらうことに慣れきつた私と真さんと。笑顔炸裂でちょ

つと天然っぽくてまつすぐでイイ子の大橋さん！ 大橋さんは絶対『ありがとう、誠一さん！ 優しくて頬もしくってかつこよくて最高！ 大好き！』みたいなこと平氣で言つてのけるよ！ どっち可愛がるかつて言つたら私たちは完全敗北です！ 知つてゐでしきう、誠一さんは恐竜怪獣よりも犬猫、犬猫よりもリスやハムスターが好きなんです！』

雪緒は悲愴な顔をして言つた。

誠一が自分たちから離れる？ いつもの風景がふつと眞の脳裏をよぎる。そこからぼっかりと自分と並ぶ人影が一つ消えるなんて。

「……そいつは困るな」

眞は小さく首を横に振つた。

「ちょっと視察が必要だ。俺は今から誠一のところへ行つてくる」「ようやくわかつてくれたんだね」

雪緒は鋭い眼差しをいくらかやわらげてうなずいた。

「いつてらつしゃい。私、もう少し遊んでいい？」

「ああ、好きに使え。水分補給を忘れずにな」

眞はそそくさと部屋を出ると、扉をしめてから大きく息を吐き出した。

『『ありがとうございます、誠一さん！ 優しくて頬もしくつてかつこよくて最高！ 大好き！』』

眞は扉を背にしてずるずるとしゃがみこんだ。耳の中でさきほど

の雪緒の妙なモノマネが響き渡つている。

「……よからぬことは考えるべきではないな」

どうにか平静を取り戻そつと、誠一の家へ行く前に15分ほどドリンクをすることにした。

いままでは、誠一の顔も雪緒の顔もまともに見れそうにない。

それは前から知っていた変化に、真が初めて向き合ってみた瞬間のことだった。

第7話 ある日の真と雪緒（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

第8話 もののまの誠一と真

誠一は、医者かカウンセラーのどちらを呼ぶべきか、と真剣に悩んでいた。

なんだつてこの幼馴染は、冬空の下で汗だくになつて我が家の中関先で息を切らしているのだから。

「せ、誠一……、は、は、は……」

「お前は変態か。それとも迷子か。ここは俺たちだ」「知つている……は、は」

真はフーっと大きく息をつくと、シャツの袖で額をぬぐつた。「話があるんだが、その前にシャワーかけてくれ」

「自分ちの使えばいいだろ?」
「雪緒がいる」

雪緒の名前を出されでは引き下がるしかない。一応コイツにも恥じらいといつものがあつたのか、としぶしぶと真を家に上げた。湯気をたてている真を風呂場につつこむと、誠一は台所へ戻る。明日の弁当の仕込みをしていく最中だったのだ。誠一はじゃがいもの皮をむきながら、真がここへ来た理由について考えていた。予想は付いている。

最近どうにも機嫌が悪い雪緒のことだ。

そしてなぜ機嫌が悪いかも、なんとなくわかつている。

誠一は雪緒に対してもうな思いを抱いたらしいのか測りかねていた。

嬉しい？ 照れくさい？

しかし、誠一の田元は緩むどころか険しさを増した。

『富田センパイとコツキーつて付き合つてるのー!?』

『お似合いだと思ったのに』

やはり、これは後悔?

いざれにしても前々からわかつていたことだ。向き合つ時が訪れた、ということなのだろう。誠一は静かに包丁を置いて、重箱を棚に仕舞い込んだ。じゃがいもは明日何かに使うことにしよう。

整然とはしているものトレーニング機器が場所をとつている真の部屋に比べ、誠一の部屋は机と本棚以外にモノがなく殺風景だ。本棚にはまばらにしか本がなく、持ち主の嗜好はうかがえない。真は迷うことなく椅子に向かい、ベッドに腰を下ろした誠一を見下ろした。勝手知ったるなんとやら、真は誠一のジャージを借りて我が物顔で部屋に居座つている。

「率直に言ひや」

「ああ」

真はきつぱりと言つた。雪緒には「偵察」と言つたが、そんな回りくどいマネは真にはできない。

「あの一年女子、どうするつもりなんだ」

「……どうするつて」

予想通りの質問に、誠一は笑いをこらえるのに苦労した。どうせ真は一年女子の名前すらよく覚えていないに違いない。勉強はできる男だが、必要がないと思ったことに対してもどことん無頓着だ。大橋愛梨は完全に真の中でいらない人間と選別されている。

雪緒はそれをわかっている。

「お前がとられやしないかと、雪緒が不安がついている。ここ最近ずっと機嫌が悪いことは気づいてるだろ?」

「そうか」

「そりが、じゃない。ハツキリした態度を見せてもらわないと、俺も困る」

真は誠一の煮え切らない答えが気に入らない、とばかりに眉をひそめてみせた。答えなんて決まっているだろう。そんな声が聞こえてきそうだ。自信に満ちて揺らがない真のその態度。

それが、誠一の心に大きな波をたてた。

「うるせえな」

「何？」

「なんでイチイチお前にンなこと言わなきゃいけねーんだよ」

誠一は怪訝な顔をする真に問いかけた。地の底から出しきたような声音である。

「お前らはそうやってなんでもかんでも自分たちの言つとおつこさせてーのか。いい加減うつとうじいんだよ」

「誠一」

「毎度毎度ソレだ。誠一、セイイチ。俺はお前らの保護者でもなんでもねー」

誠一はこれ見よがしに大きなため息をついた。

「そもそも今までがおかしかったんだ。なんとか我慢して付き合つてやつてたが、人の色恋沙汰にまで口つつこむようなら終わりだな。お前らの束縛ももうこりごりだ」

「色恋？ そんなモノにするつもりなのか、お前」

誠一の発言でも何よりそのことに驚いた、と言わんばかりの眞の反応にいささか拍子抜けしながら、誠一は続けた。

「いいか、眞。俺はもうお前と雪緒には干渉しねえ。お前らもそつしろ。幼馴染とも思うな。2人で好き勝手やってろ。俺に一度と面倒かけるなよ」

話は終わりだ、と誠一はベッドに横たわって手を払つた。出でいけ、のサインだ。

しかし眞は出ていかない。

「誠一」

「なんだよ」

「お前、あの一年女子とどうするんだ」

真はもう一度ゆっくりと誠一に尋ねた。誠一は寝転がったままジットリと真を睨む。相手が真でなかつたら、恐怖にひきつりながら逃げていくであろう眼光だ。

「お前らには関係ない。雪緒にもそういう言つとけ」

「ふむ」

眼鏡をかけなおし、真はまじまじと誠一を見据えた。憤りや困惑、あせり、怒り。誠一の予想に反して、真の目からそういうた激情はまったくのぞけなかつた。「何を言つてるんだ誠一、正氣に戻れ！」とつかみかかっていくことを想定していた誠一は、落ち着いている真に逆に不安を覚える。

「いいだろ？ しばらく放つておいてやる」「はア？」

「俺も思つところがあつたからな」

あまりに傲岸な物言いに、誠一は本気で額に青筋をたてた。

何考へてんだ、「イツ。どこまで上から目線なんだ。

真は立ちあがつて先ほど脱いだ自分の服をつかむと、素直に部屋を出る。そしてドアを閉める前に振りむいて言つた。

「誠一、俺は予言する」

「……ンだよ」

真の眼鏡は蛍光灯の光を反射して白く光つた。

「お前は今以上に後悔する」

真の静謐な声が、せまい部屋の中でゆっくりと広がつていつた。それはまるで誠一に死を宣告する死神のような音だった。

第8話 やの日の誠一と真（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

第9話 雪緒と真と生徒会長

気づくと右手はゆっくりと栄養補給ゼリーを握りつぶしていた。おかげで歩くたびに道路に点々とゼリーが落ちていく。

「道路はカロリー攝取しないぞ」

「真さんのバカ」

「いい加減機嫌を直せ」

「真さんのバカ」

「雪緒」

「真さんのバカ！」

雪緒は自分の左手を引いている真を罵った。真は呆然として動けなくなつた雪緒の手首をひつつかみ、無理やり引っ張つてきたのだ。「仕方ないだろ？、誠一が嫌がつたんだから」

「真さんが怒らせたのが悪いんじゃない！　どうせまた無神経でどストレートな物言いしたんでしょう？、まさかこんなことになるなんて」

雪緒の顔はいつも通り冷めているが、内心は焦りや不安がのたうちわまわっている。よくよく見れば、瞳がゆらゆらと揺れていることがわかつただろう。それだけの感情表現さえ雪緒には珍しいことだった。

「朝に弱い誠一さんが先に行っちゃうなんて」

「驚きだな。おかげで雪緒も日が覚めたようだが」

「真さんはのんきすぎるわ」

今朝、真の携帯電話には誠一から『登下校も昼飯も別。校内でも今後一切つるむ気はない』といつそつけないメールが届いていたのだ。昨夜の顛末を何も知らない雪緒がまさか、と何度も玄関のチャ

イムを鳴らしてみても、家人は誰もいなかつた。雪緒は寝ぼけ眼を見開いて事の原因と思われる真に詰め寄つたが、真はいつも通りの態度を崩さない。

「メールも電話もくれない。っていうか着信拒否。どうしたらいいまで誠一さんを怒らせられるの、真さん……」

雪緒は途方にくれたように携帯電話を見下ろした。何度新着メールの問い合わせをしても無駄だった。

「誠一さん、やっぱり大橋愛梨さんのこと……」

「雪緒。大丈夫だ」

「何が？」

真は雪緒を安心させるように微笑んだ。手錠のように手首をとらえていた手をゆるめ、今度はしつかりとつなぎなおした。

「俺を信じていろ」

雪緒と真は気づいていなかつたが、真が雪緒に微笑みかけたとたんに叫び声がそこかしで上がつていた。その大半は登校中の山城学園高等部生徒である。

「うそ、ついにあの2人くつついちゃつたのー!?」

「やだやだやだ、なんでええええええー!? 富田先輩ーーー!」

「今までサカガミに連行されるように登校してきてたのに……ー!」

「あ、有辺さん……ー! 富田はアレド安全牌だと思つてたのにー!」

「！」

手をつないでいる。

熱く見つめあつてゐる。

富田真が優しい微笑み付で有辺雪緒にわざわざいしている。

そして何より、坂上誠一がいない！

3人組、カップル成立につき解散か！？との噂が校内をかけめぐるのに、たいして時間はいらなかつた。

「ユッキー、坂上センパイとケンカしたつて本当なのー!?」

愛梨は雪緒が教室に入ったとたんに声をかけてきた。大きな瞳が悲しそうにうるんでいた。雪緒が今一番会いたくない相手だ。

「登校中に坂上センパイに会ったの。一人だったからコッキーたちはどうしたんですかって聞いたら……」

愛梨はためらつて唇をかんだあと、細い声で「あいつらとはもう関わらねーことにした」と誠一が告げたことを伝えた。

「ねえ、ダメだよ、ケンカなんて。あんなに仲いいのに」「誰のせいだ、と細弾したい気持ちをおさえ、雪緒は黙る。口を開けば愛梨を傷つけることばかり言つてしまいそうだった。

愛梨はよほどショックだったようで、周りのことが見えていない。教室中の好奇の視線を浴びていることにどうして気付かないのか。雪緒はこれ以上その話をこじでしたくなかった。

「……あたしのせいだよね」

「え？」

まさか、自覚していたのか？ 雪緒が思わず聞き返すと、愛梨は真剣な面持ちで続けた。

「昨日、あたしが『富田センパイとコッキー付き合つてるの？』なんて言つちやつたから。隠してたんだよね。だから坂上センパイ、怒つちやつたんだよね……」

「……え？」

野次馬の中に「やつぱり」とつなづく人がいることに気がつき、雪緒は愛梨の『妄想』を理解した。

「でも、そういうのつて隠されるとちょっと傷つくかも。あたしもそうだし、坂上センパイはもつとだよ。センパイ、かわいそつ……」

愛梨はポーネールをしゅん、と垂れさせた。雪緒はそれを冷ややかに見下ろす。

「付き合つてない。隠してもいい」

「え？」

今度は愛梨が聞き返す番だった。

「昨日言った通り、私と真さんは付き合つていない。恋人じゃない

「え？」

「え、でも……」

「誠一さんと今田監校しなかつたのは別の理由。変な憶測しないでしん、と教室が静まり返る。雪緒は周囲から何を言われてもどこ吹く風、のスタンスをとっていたところに、このよつて真っ向から嫌悪感を示すのは初めてのことだ。

びくつと体を震わせた愛梨は、まるで子リストのよつだった。その仕草に余計に雪緒の苛立ちは増す。

「う、ごめん！　なーんだ、あたしすっかり勘違いしちゃって。ごめん、ごめん！」

えへへ、と無理やり作り笑いをすると、愛梨はおじけで舌を出して見せた。

「でもやつぱりケンカはまだだよ。お皿はどうするの？　一緒に食べるんだよね？」

「一緒に？　それは自分のことも入れていいのか。

おずおずと上田づかいにこちらをうかがいつ愛梨から皿をそりし、雪緒は淡々と言った。

「しばらくお皿も別になるみたい

「えつ！　そんなのダメだつて！　時間置くと余計にじれちゃう」愛梨はダメダメ、と首を横にふる。そして「あ、わかった！」と光さすようにパアッと笑顔を見せた。

「あたしにまかせてよ！　顔合わせづらいのはわかるし、でも仲たがいしたまんまじやもつとマズイし…　あたしが仲立ちするー！」

ぐつと握りこぶしを作った愛梨は、鼻息もあらく宣言した。

「安心して、コッキー！　必ず坂上センパイと仲なおつきさせてあげるー！」

雪緒は、あまりの衝撃に頭の中身がとろけだしそうな心地がしていた。

眞の何を信じればいいのかまったくわからなくなつた雪緒であった。

昼休み、いつもの空き教室へ行つてもやはり誠一の姿はなかつた。落胆した後に雪緒と真が向かつたのは生徒会室だつた。あの場所は3人で過ごす場所だ。楽しい食事の時間でも耐えがたい喪失感に襲われてしまつ。

「2人で口々に来るなんて、珍しいこともあるもんねえ、富田クン？」

「まあな。たまにはいい」

「よくない口もいるみたいだけど？」

やたら艶めいた唇で弧を描くのは、生徒会長の一本松清香である。黒いストッキングに包まれた足は理想的なラインを描き、パイプ椅子から投げ出されていた。雪緒と同じく完璧に校則通りの制服の着こなしながら、なぜか彼女の場合は独特のあだっぽさが醸し出される。

城山学園きつての英才と名高い清香は、圧倒的カリスマをもつて生徒会長として君臨していた。口元のホクロが魅力的だが、発せられる言葉は誰もが耳を傾けざるを得ず、いつの間にか従つてしまつているという恐ろしい力をもつてゐる。

彼女は3人組を「謎」としない、数少ない人であった。

「相変わらずバカやつてんのねエ」

というのが彼女の3人への評価である。そしてこれは限りなく正解に近い。

彼女も校内の有名人であり、たいていは1人で生徒会室に居座っている。清香はひょいと顔をのぞかせた2人を部屋の主として歓迎したのだ。

「会長。真さんのせいでの誠一さんが怒つてしまつたんです」

「あら、それで寂しいのね、かわいそうな雪緒ちゃん。富田クンさいてー」

「俺のせいじゃない。誠一が勝手に言い出したんだ。雪緒をあおる

な、一本松」

清香はクスクスと笑うと、雪緒の手元をのぞいた。

「でも、坂上クンお手製弁当がないせいでようかわいそうになつてるんだもの。雪緒ちゃんのお昼「ハ」ン」

雪緒の昼食メニューは、ビタミン摂取のできるゼリー飲料と真が渡したメロンパンであつた。

「雪緒ちゃん、わたしのお弁当食べる？」

清香は折詰のような弁当箱を雪緒の前に差し出した。

「いえ、大丈夫です。ありがとうございます」

「そあ？ 残念。わたしも雪緒ちゃんに餌付してみたかったのに」本当に残念そうな清香に、真は露骨に顔をしかめてみせた。

「雪緒ちゃんってホントかわいい。アンタらにはもつたいない」

「一本松！」

「おお、怖い怖い」

清香はひょうひょうと笑つた。

「ところで、坂上クンはどこに？ つてアラ、今度はこっちが怖い顔？」

雪緒の感情の変化をなんとなく感じ取つた清香は、真に目だけで問いかけた。

「……誠一は、問題の一年女子と一緒にいる」

「へえ！ ホントに仲良しだつたの、あの天然子リストちゃんと」

「天然子リストだと？」

「わたしとすれちがつた時、『うわー、なんだかエロい美人、……つてああああ！ す、すみません、失礼なこと言つて！ つい心の声が！ センパイ、とってもキレイですねっ』つて言われた。わたわたしながら

「そつか」

あんなストレートに言われたのハジメテー、と清香は笑う。彼女はたいてい口元に笑みを浮かべているが、それが彼女の表情というものを隠している。内心どう思つてている事やら、と真は嘆息した。

「雪緒ちゃんはあの『が氣』に入らないのね？」

「だつて……」

雪緒はメロンパンのクッキー生地のみ剥がして口に運んだ。言い訳もしようがない。自分の狭量さには呆れてしまつが、それでも気に入らないのだ。雪緒はぱつと悪をから、清香を見ることができない。

「いいの。ガンガンいじけてみせなさい。嫉妬して、涙ぐんで、わめいてみなさいよ」

「はい？」

「それが一番いいんじゃないかしらねー」「

清香は漆塗りのハシを弄びながら歌うよう言つた。

「……雪緒にそんなことされたら、俺が誠一にどんな田にあわされるかわからないんだか……」

「でも、向こうから絶交されちゃつてゐんでしょう？　じゃあこじやない」

「む」

「おもしろこわよオ、絶対！」

ね、そつしなさいよ、と清香は雪緒にすり寄つた。

雪緒の思案顔がまた真をあせらせる。

誠一、お前は俺の考え以上に後悔するところになるかも知れないぞ。

真は心の中で幼馴染に語りかけた。

第9話 書籍と眞と生徒会長（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

第10話 やのいの誠一と愛梨

城山学園高等部には広い中庭があり、生徒たちの憩いの場となっていた。周囲の花壇には花が植えられ、小さな池には鯉が泳いでいる。パラソル付のテーブルでおしゃべりに興じれば、気分もはずむことだらう。

ぽかぽかと暖かい春であつたなり。

「なんだってこんなとこ呼び出すんだよ……！」

誠一は体をがくがくと震わせて愛梨を睨みつけた。

「せ、センパイ、すみません……！ 今が冬だということを失念していました……！」

負けじと震えていた愛梨は、鼻をすすりながら校舎に戻ろうと指をさす。

昼休みになつたとたんに誠一の携帯電話にかかるってきた電話は、件の1年生・大橋愛梨からのものだつた。いわく、「いつしょにお弁当を食べましよう」とのこと。

予定のなくなつた昼休みであるし、誠一は深く考えずにして承した。とにかくあの2人と離れていればいいのだ。愛梨は場所をこの中庭に指定したのだが、花もなく池の水は凍りつくこの季節にはまったく適さない場所であつた。

すぐさま場所を移ることにした愛梨と誠一は、結局いつもの空き教室へと向かつた。ちょうど真と雪緒が生徒会室に着いたころであった。

「坂上センパイ、『めんなさい！ まさかあんなに寒いなんて。

「へ、ふえっくしゅ！」

「外つて時点で気付けよな……ホラよ」
しゅん、としおれる愛梨に、誠一はポケットから温かいココアの缶を差し出した。

「え？」

「寒いだろ。飲め

「あ……ありがとうござります！」

愛梨はぱつと頬を染めて誠一からココアを受け取る。冷え切ったせいか、小さな指先が赤くなっている。

それを見て、誠一の脳裏にふつとよぎるものがあった。あかぎれが痛々しい細い指。痒がつて何度もはがしてしまったさぶた。それでもクリームを塗らない無精者。俺がいなければ、彼女の手はあつという間にガサガサになつて……つていかんいかん！ 誠一はすぐさま首を振つてその考えを打ち消した。

「さつさと食つで。時間がなくなつちまつ」

「はいっ！」

誠一はコンビニで買つたおにぎりとパンを取り出した。

「あれ……、今日はお弁当じゃないんですね」

そんな量で足りるのか、と心配になるほど小さな弁当箱を膝に乗せていた愛梨は、不思議そうに首をかしげた。

「しばらく手抜きだ」

「……コッキーたちとケンカしたから、ですか」

大口を開けておにぎりにかぶりついていた誠一は、眉をピクリと跳ねあげて愛梨に顔を向けた。

「別にケンカじゃねーよ」

「でも！ もう関わらないって……」

愛梨はハシを置いたまま、大きな目を伏せてうなだれた。
「付き合いきれなくなつただけだ」

「でも」

「うるせえ。関係ねーんだから黙つてろ」

「……すみません」

「……さつさと食え」

のりのりと食べ始めた愛梨は今にも泣き出しそうなほどだ。それを見てまたもや何かが頭に浮かんでくる。じみあげる何かを押さえつけるように、誠一は苦々しい思いでお口元を噛み潰した。

「坂上センパイ……」

「んだよ」

「あの、差し出がましこんですナビ……」

「やう思ひなら黙つてひ」

「あう」

愛梨はハシ先を口に当してひるんでみせる。それでも黙る気はないようで、おずおずと愛梨は続けた。

「じ、じゃあセンパイはこれから誰とお昼食べるんですか……。ユッキーと畠田センパイは2人だけ、坂上センパイは1人になつちやう」

「ほつとけ」

「ほつとけませんよ！ あ……、そつか」

「あ？」

「あたしがいるじやん！」

「はア あ？」

「坂上センパイ、あたしと食べましようね！」

「いや、今食つてるだらうが」

「これからもですよ！ 明日も、明後日も… ね、やうしましよう！」

「あたしもお弁当づくしがんばりますからー！」

愛梨は輝くような笑顔を見せて、拳を突き上げてみせた。

「センパイ、今度からは名字じゃなくて、誠一センパイって呼んでいいですか？ あたし、センパイともつと仲良くなりたいんです」

今度は祈るように手を組み、誠一を上田づかいにのぞきこんだ。

お願いお願い、と愛梨はおねだりをする。

こんなお願い、当然ながら誠一には初めてのことだった。後輩に

懐かれたこともない。親しげに「名前で呼んでいい…？」なんて言われたこともない。どうしていいのかまったくわからなかつた。いきなり元気になつてぐいぐいと突っ込んできた愛梨の勢いにのまれ、誠一は思わずうなずいてしまう。

「やつた―――！　じゃあ誠一センパイ、ようじくお願ひしますー！」

「……ところづけで、あたししばらく誠一センパイとコハーン食べるね！　コッキー、誠一センパイの『機嫌がなおるまで、ちょっと待つてね！』

「……そう

意気揚々と教室に戻ってきた愛梨に、殺意をかくしきれなくなつてきた雪緒であった。

第10話 やのいの誠 - とみ梨（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

第1-1話 わりとその夜の真と雪緒

誠一から絶縁を言い渡され、愛梨から笑顔爆弾を落とされた日。雪緒は今夜も真の部屋にいた。幸いなことに、今日は大き目なパーティーにキユロットパンツといった格好なので真もヒヤヒヤせずには済んだ。そんな真の気も知らず、雪緒は眞のベッドに寝転がつたままピクリともしない。ストレス発散のパンチングボールには見向きもしなかつた。

「よほど衝撃だつたらしい。」

眞は仕方なく床に直接腰をおろし、ベッドに頬杖をついていた。

「雪緒」

返事はない。

「おー、雪緒。返事くらこしる」

体をゆすると、雪緒はほんやりといきなりを向いた。

「真さん、お腹がぐるぐるする」

「腹が減ってるのか」

「減つてない」

雪緒はまたふいっとそっぽを向いてしまった。わざわざからずつといじの調子で、会話が成立しない。眞は雪緒をあやすよつこゆすつた。

「雪緒。俺はちゃんと言つてくれないとわからない」

「俺は誠一ではないのだから、と暗に伝えたつもりだ。」

「……ごめんなさい。スネてたの。でもお腹がぐるぐるしてるのは本当。私ってこんなに嫉妬深かったんだ」

「嫉妬？あの1年女子にか」

「うん。誠一さん、私たちとじやなくて大橋愛梨さんとお昼食べるんだって」

雪緒はそれだけ言つと、また枕に顔をうずめてしまった。真は、なんとなく雪緒の腹のぐるぐるとやらがわかるような気がした。だが、雪緒のそれよりも少々複雑だ。なにせ自分の腹の中の渦は2つある。雪緒の手前表には出さないが、内心では忸怩たる思いを抱えていた。

誠一は、自分たちよりもあの一年女子といったほうがいいというのか。これまで17年間ずっと一緒にいて、今更何を言つのだ。

そして雪緒。お前は俺がそばにいるといふのに、どうして誠一のことばかり気にする。もしも俺がそばを離れたら、今と同じように嫉妬してくれるのか。

これは眞のプライドの問題だ。軽々しく口には出せない。こんなにグチグチと悩むのはガラではないが、考えずにいられないのが辛いところだ。また走りこみにでも行こうか、と腰を上げかけたところで、思いもよらない言葉が雪緒の口から飛び出した。枕のせいで少しばかりぐぐもつてはいたが、眞の耳にはハツキリと届いた。

「大橋さんが眞さんを気にいってくれればよかつたのに」

「……なんだと」

目の前が真っ赤になつたような気がした。

今までに抱いたこともない感情が、何よりも大切な幼馴染へと向けられている。眞はそのことに驚きつつも、自分を抑えることができなかつた。

「もう一度言つてみる」

うつ伏せになつていた雪緒の体をひっくり返し、肩を押さえつけるのは簡単だつた。驚いている隙に馬乗りになつてしまえば、もう雪緒は起き上がれない。

これで雪緒はココから動けない。眞は奇妙な満足感を覚えたが、まだ激情はおさまらなかつた。

「俺が離れればよかつたとでも？　お前のそばには、誠一がいれば

いいのか。お前らに俺は必要ないか」

雪緒は右手をつっぱって真の体を押し返そうとする。しかし真はその手首をも捉えて雪緒の抵抗を封じた。

「言え」

真は雪緒の手首をつかむ左手にゅっくりと力をこめた。いや、こめようとした。

しかし、雪緒の凹いだ瞳に自分がうつっていることに気付くと、おさまりがつかなかつた気持ちが、現れたときと同様急速に消えていった。

雪緒はおびえても、怒つても、呆れてもいなかつた。おだやかに真を見据えている。

真は力をこめるかわりに自分の顔を雪緒の鼻先に近づけた。眼鏡が邪魔だ、と真は思つた。

バッシン！

乾いた小気味よい音が部屋に響く。

「……痛い」

「だから私は真さんならよかつたのにって言ったの」

雪緒はふん、と鼻をならした。真の頬を叩いた右手をさすりながら、真をぐいっとどかせて起き上がつた。真の拘束はとつぶしゆるんでいた。

「バカな勘違いしないで、真さん。私は真さんがいなくなるなんて考えてないんだから」

雪緒は淡々と言つと、ベッドの上で正座した。つられて真もあぐらをかいて向きなおす。

「真さんの場合は、もし大橋さんのような女の子が来ても大丈夫だと確信してゐるの」

「確信？」

雪緒は大きくうなづいた。

「今までどんな相手から告白されようが、まったくなびかなかつた
真さんだもん。もしも大橋さんには2人でお食いつしょ食べましょ
つて言われたら真さんどつする？」

「君といふと疲れるから、申し訳ないが遠慮してくれ、と言へ
「ほらねー」

雪緒は、真の少しだけ赤くなつた頬をなでた。真は何が何やらわ
からない、という顔だ。しかし雪緒はおかまいなしだ。むしろ「機
嫌は上向きになつて」といふ。

「それに、せつないので確信は深まつたから。真さんはわかりやすく
ていー」
「……」

「ばかにされてるな、と思つたが、先にばかなことをしたのは真
のほうだ。ここはおとなしくしておいたほうが身のためだ。

「真さんはちやんと妬いてくれるでしょ?」

「妬く?」

「誠一さんと、私の両方」

雪緒は口角をほんの少しだけ上げて見せる。淡く色づいた唇が目
にとまり、眼鏡なんぞに氣を取られるのではなかつた、と真は悔し
く思ひのだつた。

第11話 セリヒの夜の真と雪緒（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

第1-2話 愛梨と雪緒

金曜日の放課後、教室前の廊下を掃除しながら愛梨は懸命に口を動かしていた。こここの当番は愛梨と雪緒の2人だけだったので、気兼ねせずおしゃべりをしていられる。

「誠一センパイってやっぱり優しいよねー！ あたしのベタクソなおにぎり、ちゃんとおいしいって食べててくれたんだよ！ すっごく嬉しかったー！」

「そう」

「あたしが甘いもの好きって言つたら、イチゴミルクおじつってくれたの、おにぎりのお礼つて！」

「へえ」

「誠一センパイ、お菓子作るのも得意なんだつてー。あたしも食べてみたいなア。今度お願ひしてみようつと」

愛梨は思わず顔がゆるんでしまう、といつた具合に頬に手を当てて微笑んだ。冬の寒さなど感じさせず、のぼせたように雪緒に語りしている。

雪緒は必要最低限の相槌しか打たない。しかし、愛梨はまったく気にならなかつた。自分の中の誠一のことでの胸がいっぱいだつたらだ。

まさか、転校先でこんなステキなことが起こるなんて！
愛梨ははしゃいでいた。

転校初日に出会つたクラスメートは、愛梨が今まで会つたことがないほど綺麗な女の子だつた。ショートカットで凜とした雰囲気を持ちつつも、愛らしさは損なわれていない。口下手でクールなところ

うがまた魅力的だつた。愛梨はこの子と仲良くなりたい！と強烈に思つた。慣れていけば、きっと満面の笑みを浮かべて心の壁を取り払つてくれるに違ひない。そのとき「いや、あたしたちは本当の友達になれる。

そしてそんな雪緒の幼馴染だという真と誠一。真はまさに人気者の優等生といった感じで、好感を持てた。文武両道の尊敬すべきセンパイなのだろう。そして誠一！ 外見は確かに強面だ。それで学園中から怖がられている。しかし本当はとっても優しくて心配りのできる、ステキなセンパイ。

何やら縁があつて2人で過ごす時間が増えたが、日に日に誠一の良いトロロが見つかつている。

今では昼休みが一番好きな時間だ。

みんなが知らないセンパイをあたしは知つている！

誠一のことをもつと知りたい。誠一は、自分のことをどう思つてくれているのだろう。

愛梨にとつて初めての気持ちだつた。

今までだつたら、「こんなにステキなセンパイのこと、みんな誤解してゐる。本当のことを知つてもらわなきゃ！」と奔走していくところだらう。しかし今の愛梨は違つた。

できるなら、あたしだけが独り占めしたい。あたしだけが、知つていていい！

否定していたものの、やはり真と雪緒はお互い好き合つてゐるようになつてゐない。これを機におそらく2人は想いを打ちあけるだらう。

そうなつたら幼馴染として、コツキーはきつとあたしに協力してくれるはず。

愛梨は全てがバラ色に見えていた。そのフィルターを通した雪緒は、愛梨にとつてきつかけを作つてくれた天使だ。

「……とにかく、誠一さんの「J機嫌なおつた？」

愛梨は、雪緒のその一言に凍りついた。

そもそも雪緒・真と誠一の仲をどうもつたために誠一のところに行つた愛梨だ。

それがどうした。自分はこの一週間、誠一に雪緒と真のことを説得しようとしたのは初日の月曜日の一度きり。それ以降はかたくなに誠一が拒んだからであるが、愛梨が誠一との時間を楽しむ方に熱を注いでしまったことが一番の原因だ。

なめらかに動いていた口が、いきなり重くなってしまう。

「あ……、あの、ゴッキーごめんね。あの、あの、誠一センパイはまだ2人と口利きたくないみたいで」

「なぜ？」

「やつぱり、たぶん富田センパイとゴッキーのことでじやないかなア」「私たちのことって？」

「だ、だから、2人が付き合つてることに気を遣つて……」「違つていう誤解を解いてくれるために誠一さんのところに行つてくれていたんじやなかつたの」

雪緒は愛梨に背を向けて、隅の「みをほつきで掃いた。

「あ、いや、あのね……やつぱり、正直に言つたほうがいいよ。きっとそういう態度が誠一センパイ怒らせるんだと思つよ」

厳しいことを言つようだが、ここはハッキリ言つておかなければならぬ。愛梨は急に使命感にかられた。あの誠一の優しさは、怒つているようにみせかけてじれつたいたい2人を応援しているに違いない。ならば愛梨もそれを後押しするのが誠一のため、みんなのためになるというものだ。

「たぶん、きっと、思つよ」

雪緒はゆつくつとつぶやいた。

「ねえ、それつて誠一さんから直接聞いたの？」

「え？」

「なんだか誠一さんの話つていうより、大橋さんの推測にしか聞こ

えなかつたから」「

雪緒は愛梨に向かってしつとりした流し田を向けた。

思わず同性である愛梨がドキリとしてしまつようなものだつた。

そのせいで雪緒の言葉のトゲに気付かない。

「え、えつと……あたし、がんばるから！」「めんね、コッキー」
何をがんばるのか、なにがごめんねなのか。愛梨はとにかくこの
きまざい空気を終わらせたかった。

「いいの。気にしないで」

雪緒はそれだけ言つて掃除用具を片づけ始めた。

「じゃあさよなら」

愛梨が浮かれてしゃべり続けている間に掃除は終わっていたらし
い。雪緒はモップ片手に立ちつくす愛梨を置いて帰つて行つた。

雪緒に対し、天使とは違う一面を見たような気がした。しかし愛
梨はあえて見なかつたこととする。

だって、あたしは雪緒の友達だから。

こんな気持ち、友達に対して抱いていいものではないから。

第1-2話 愛梨と雪緒（後書き）

あけましておめでとうございます！

年をまたいでしまいましたね。聞が空いてしまってすみません。

本年もよろしくお願ひいたします。

ご意見・感想をお待ちしております。

第13話 誠一と真 その1

誠一が真と雪緒に絶縁宣言をしてから、2週間がたつた。朝も、昼も、夜も。誠一は真と雪緒に会っていない。

日曜日、家から一歩も出ず、一人でのんびりと過ごす。誠一の母親はバリバリのキャリアウーマンであり、休日返上で働いていた。誠一がのろのろと起きだしてきたときには、家中は静まり返っていた。

だから今日は誰とも口を利いていない。誰かの行動に気をもむことも、叱りつけることもしないで済んだ。誠一は自室でくつろぎながら、しみじみと一人の時間に感じ入っていた。

携帯電話は電源を落としたままだ。もともと連絡が来る相手は限られている。

静かだった。

買ったはいいがページを開かないままだった手芸雑誌を広げ、口一ヒー片手にページをめくる。と、誠一の目にとまるものがあった。春先に使えそうな、簡単な手編みのニットマフラーだ。細身で伸縮性があり、使い勝手がよさそうである。つまり、多少乱暴に扱っても大丈夫ということ。力任せで大雑把な真にはちょうどいい。「もう暦では春だ！ 寒いなんて軟弱なこと言ってられるか！」と薄着で飛び出そうとするバカを押さえつけるのは自分の役目で、動きをとめたスキに雪緒がコートやマフラーを装着させる。そんな毎年恒例のやり取りが思い出され、ふつと誠一の口元がゆるむ。

次に気になったのは、手芸にまつたく関係ない『冬の手荒れ対策特集』だ。専用のクリームや綿の手袋、保湿剤といった様々なものが紹介されている。そういえば、雪緒の手はどうなっているだろうか。ぱっくりとひび割れた小さな指を見るのはあまりに忍びない。

澄ました顔で我慢して、耐え切れなくなつてからビービー文句を言う雪緒の顔が頭に浮かぶ。しかし、小さなことはまったく気にしない真では雪緒の痛みに気づいてやれないだろう。

「…………いやいやいや。もう関係ねーだろ」

誠一は熱いコーヒーを一気に喉に流し込んだ。

たつた2週間だ。まだそれしか時間は経過していない。

それなのに、なんだつてこんなに落ち着かない！

苛立ちを抑えるように雑誌を放り投げた誠一は、何か気を紛らわそうと立ちあがつた。しかし、何をしたらいいかわからない。料理だつて食べるのが自分とあつてはやる気がでない。雑誌も読んでいられない。やりたいこともない。どういうことだ。

なぜかと言えば簡単だった。真と雪緒が勝手に寄ってきて、散々振り回し、誠一は後始末に追われる。それが誠一のいつもの過ごし方だ。自分からこれといった行動を起こさない誠一一人では時間をもてあますばかりだ。

学校がある間はよかつたが、休日では何もすることができなくなつてしまふ。

自分といつ人間のつまらなさにはつくづく嫌気がさす。

そしてふと、真が自分に言つたあの言葉がよみがえつてきた。

『お前は今以上に後悔する』

いや、違う。俺は後悔しないためにこいつある道を選んだはずだ。

納得したはずだ。

今、俺が後悔してこる」ととは？

そこへ、来客を告げるチャイムが鳴つた。いつもなら留守を使つたが、この際時間つぶしになればなんでもいい。勧誘だろうがセールスだろうが出てやろうではないか。そう思つて誠一はインタ

一フォンも確認せずに玄関を開けた。

「よひ

「……

そこにはいつもと変わらない真の姿があった。

誠一は無言で扉を閉めようとしたが、悪徳セールスよろしく真は靴の先をつつこみ、無理やり体を押しこんできた。

「いきなり何をする。さつさと入れる」

「何してんだよ、お前はよオ……！」

「しばらく我慢したからな。もつといいかと思つて

「もういいとかじやねえつつのー。何しに来た！」

「お前に会いに来たにきまつててるだろ？」

悪びれた様子もなく、というか悪いとはまったく思つていのないのだろう。真は真顔で誠一に「何を言つてるんだコイツは」という視線を向けた。

「来るなっつたるーが！」

「だから来なかつただろ、2週間も」

「ずっと来るなつて意味だよ！ 通じてねーのか、お前は！」

「何、ずっと？ なんだそれは。期限をキチンと言わないお前が悪い

い

眼鏡のズレを直しながら淡々と言つてくる真には殺意を覚えなくもない。しかし、こんなバカげたやり取りに安心している自分がいる。

真はさつさと2階の誠一の部屋にあがりこむ。誠一はその背を追いかけるしかなかった。

認めたくない。だが、確かにこれは誠一が望んでいたことだった。いつも突飛な行動をしてくる真がいなければ、誠一は動けない。何もできない。だが、真がそばにいるならば、誠一は眞の心配をしていればそれでいいのだ。誠一はさきほどまでの悩みが一気に吹き飛びを感じた。

そして、はたと気づく。

真の言つていた『後悔』の正体とは、自分の価値の喪失？

「やはりここは落ち着くな」

「人家でくつろいでないで帰れ！」

真は腕を組んで言い放った。

「これでも俺と雪緒は気を遣つているんだぞ。お前が近づくなと言うから！」

「何イ？」

真は「誠一のワガママに付き合つてやるか、しかたないなア」というスタンスを崩さないつもりだ。

誠一が苦々しく聞き返すと、真はフンと鼻を鳴らした。

「俺が一人で来たことが何よりの証拠だ」

誠一の頬がひきつった。図星だ。

実はこの絶縁宣言で、何よりも恐れていたことは雪緒の襲撃だった。誠一は雪緒との接触を徹底的に避けていた。それが功をなしたのか、と思つていたが、なんと自重していたらしい。

「雪緒もわかつていいから、我慢していいんだぞ。それなのにお前ときたらメールも電話もしないで。雪緒がスネてグレてどうしようもない。俺のところに来てグズグズグズグズ言つていい。いい加減にしてくれ」

「……お前がいるんだからいいだろうが」

「よくないに決まっているだろ？ 俺が煮詰まる。この前なんか頬叩かれたぞ」

「はア？ 雪緒が？」

やれやれ、と芝居がかつた動きで肩をすくめる真に、誠一は思わず尋ね返した。雪緒はすぐヘソを曲げるが、真や誠一に対しても暴力をふるうことはめつたがない。つーんとそっぽを向いてすねるのが関の山だ。

「ま、俺が無理やり押し倒したのが悪いんだが

ガタン、と何かがひっくり返る音がした。真が座っていた椅子だ。真の顔はなぜか誠一の眼前にあり、形のよい眉をひそめている。それからようやく気付いた。

誠一は、反射的に真の胸倉をつかみ上げていたのだ。

「真……お前！」

ぐつと締め上げようとしたが、その前に真は誠一の手首をつかんで力をこめた。真の体は細身だが、それは無駄なものが一切ついていないからだ。体格では多少劣るが、力勝負では互角といつていい。「誠一。なぜ熱くなっている。離れるなんて言わずに口出したくなつたか」

「口出しどかじやねー。常識的な問題だ。女に無理やりなんて、何考えてやがる。お前はそこまでバカだったのか！ 雪緒はどうしている！」

真は誠一の手を引き離すと、軽く笑つて言った。

「落ち着け。あいつはいたつて健康だ。誓つて言つが、何もしちゃいない」

「あアー？」

「あいつがお前のことでのダダグダ言つから、俺が少しばかり怒ったんだ。だが、お前もわかるだろうが、あいつ相手じゃどうにも怒つていられなくなる。それで気を抜いたとたん間髪いれずに平手打ちされた。さすが雪緒だ」

「……そーかよ」

最悪の事態が起こつたのか、と頭の中でとんでもない想像をしてしまつたが、よくよく考えれば単純な真としたかな雪緒だ。どちらが強いかななんてわかりきつている。

「安心したか

「バカ野郎」

気が抜けて、大きなため息が心の底からこみあげてきた。そんな誠一に、真は言った。

「だから後悔すると言つたんだ」

「なんだと？」

「お前、気になつて仕方がなかつただろ。落ち着かなかつただろう」

眞の得意げな顔にイラついて仕方ない。誠一は口元をひんまげて真を睨みつけた。

なぜならそれは真実だからだ。

何をしているか。面倒は起こしていないか。バカなことをしないか。

今だつてそうだ。眞のとんでもない発言に対し瞬間的に誠一は思った。

もしも自分がそこにいれば、眞の憤りを歪みなく受け止めてやれたのに。雪緒を助けてやれたのに。

それはまぎれもない『後悔』だつた。

「2週間は耐えた。俺たちも、お前も。だが、もう破たんしそうだ。バランスが悪くて仕方がない。落ち着かないんだ。わかるだろ。お前は耐えられるのか、これからずっと？」

挑戦的な笑みだ。

誠一は何も答えられなかつた。

第1-3話 誠一と真 その1（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

真が誠一の家に押し掛けているところ。

出無精の雪緒は、珍しく一人で外出していた。駅前はせわしなく人が行き来しているが、雪緒はこの地域の名物であるまんじゅうをモチーフにした丸っこいキャラクター像の前に立っていた。

キヤメル色のコートとマフラーに手袋、と防寒対策はばっちりなのであるが、強い風がようしゃなく雪緒にふきつける。風除けの真と誠一がいなことがこんなところにまで影響するなんて、と雪緒は理不尽な苛立ちにかられていた。

といつても、雪緒のイライラの原因は寒さばかりではない。待ち合わせの相手にあった。

「ゴッキー！ ごめんね、待たせちゃった？」

甲高い声を発しながら小走りに駆けよってきたのは愛梨だつた。厚手のケープにふわふわのスカート、ちょっとヒールの高いショートブーツ。走ってきたからか、それとも寒いからか、頬が赤く染まっている。ポニーテールはいつも通りだが、私服の愛梨は制服のときよりも一層華やかに見えた。

「ううん、大丈夫。今来たとこ」

雪緒はこつくりとうなずいてそれに応えた。

「よかつた！ 寝坊しちゃつてさー、もう大慌てだったんだよ。ね、どこ行こうか」

とりあえず2人で歩き出したのはいいが、愛梨は行き先をまったく考えていらないらしい。

「遊びに行こう」と誘ってきたのは愛梨のほうだった。断つてもよかつたのだが、電話してきた愛梨の声になんとなく思つていろいろがあり、雪緒は誘いを受けた。

「私はどこでもいいけど」

「うーん、あたしも！」

えへへ、と笑う愛梨に影は見えない。思いすこしだったか、と雪緒は首をかしげた。

「とにかく寒いし……。あそこ入ろうか」

雪緒は若者向けのショッピングビルを指さした。愛梨も異論はないよひで、楽しげにうなずいている。

「ひひしてコッキーと外で会うの初めてだね！ なんか楽しくなつちやう！」

「やうだね」

たまには女同士で買い物もいいだろう、と雪緒も気分を切り替えることにした。相手が愛梨であつても、ずっとイライラしているのは疲れる。ここは少し様子見だ。

もし彼女に何か考えがあるのなら、さつとアクションを起こすはずだ。雪緒はそれを待つことにした。

雑貨・服・靴。雪緒と愛梨はのんびりと店をのぞいてまわった。かわいいを連呼して騒いでいるのは愛梨だけだったが、雪緒もそれなりに楽しんでいた。女性的な分野の買い物は1人で行くほうが気が楽なのだが、連れがあるといつのも新鮮な気分だった。

愛梨は笑顔をふりまき、近寄ってきた店員ともすぐに打ち解けて話し始める。だがそれに流されて購入はせず、雪緒を連れて上手にショッピングを楽しんでいる。

「資金のないあたしたちは何買つかはよく考えないと！ 向こうの笑顔は財布のヒモ解除装置だからねー 気をつけなきゃダメだよ、ユッキー」

「大橋さんつて思ったより器用だね」

「えー？ 思つたよりって何よー」

愛梨は「うううううう、とひじで雪緒をつづいてきた。くすっと雪緒に笑みがこぼれる。とはいってもほんの少し口元がゆるんだだけなのが、愛梨はめざとくそれに反応した。

「あっ、ゴッキー笑つた！」

「え」

「ゴッキーいつも顔固いからさー。笑うとめちゃくちゃかわいいのにもつたいない！」

愛梨は輝くような笑顔を浮かべて言った。

「さて、次のお店行こつか！ あ、あそこ並んでるティーポットかわいいー！」

愛梨は雪緒の手をひいた。「どこでもいい」と言つていたわりに、結局は愛梨のペースで行動は決まつている。

悪い気はしなかつた。雪緒も女友達がないわけではない。真や誠一抜きで遊びに行つたこともある。しかし、雪緒の鉄壁の「」とき厚い精神的壁を無理やり乗り越えようと試みてきたのは愛梨だけだった。

鋭すぎる拒絶にも嫌味にも耐え抜き、昼休み以外は雪緒にまとわりついている愛梨は、今や雪緒とセットで扱われていた。でこぼこの仲良し、と見られているのだ。

面倒で、うとましくて、離れたくて。

人の感情に鋭いらしの愛梨が気づいていないはずないのだが、それでも愛梨は雪緒のそばにいた。

やつかいだと思う気持ちは変わらない。愛梨のまっすぐさや底抜けの明るさは雪緒にはないもので、イライラさせられる。

それでも雪緒は思う。

もし、彼女が私たちの関係の中に入り込もうとしなければ、良い友達になれたかもしないのに。

休憩しようか、と喫茶店に落ち着いた2人は、温かい紅茶とケー

キを前にほつと息を吐いた。

「歩いた～！ 結局何も買つてないし…」

あはは、と愛梨は声を出して笑う。それに雪緒はやうだね、とうなづいた。

それからのんびりとケーキを楽しみつつ一人しゃべっていた愛梨だったが、急に黙り込んだかと思うとおずおずと雪緒の顔をのぞきこんできた。

「……そういえば、わ」

雪緒は、来たな、と思つた。

「誠一センパイの」となんだけど

「誠一さんがどうかした？」

「えつと…」

あれだけはしゃいで飛び込んできたかと思つと、急にしおりしくなつてこりひりをうかがう。ずっと機会を狙つていたのだ。悪いわけではない。こりひりた賢しさは誰でも持ち合わせていいものであつて、呆れるほどわかりやすい愛梨はむしろ素直であるといふ。

「あたし……実は今日、話したいことがあって」

「うん」

知つてるよ。

雪緒は声に出でずつぶやいた。

いよいよ、決着をつけなければならぬ。

第1-4話 雪緒と愛梨 その1（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

第15話 誠一と真 その2

真は黙つたままの誠一に対し、仕方がないとばかりに首を振った。
「だんまりを通されたら、もう俺にできることはないな。最終兵器
を出すしかない」

「あ？」

真は携帯電話を取り出すと、どこかへ電話をかけ始めた。
それを見て誠一はビクリと背筋を震わせる。

「ま、待て！ それはまだ早い、わかつた！ 少し待て！」

誠一は飛びかかるようにして真から携帯電話を奪い、電源を落とした。
それだけで誠一は肩で息をしている。真はもう一度鼻をならすと、鷹揚に手を振った。

「そうだな。まずはアイツ抜きで話そつか」

この野郎、と誠一は手の中の携帯電話を握りつぶしそうになつた。
まったくもつて憎たらしい男だ。

しかし、ここでアイツに登場されでは困るのだ。誠一はおとなしく従つしかなかつた。

「なア、真」

「なんだ」

「お前、雪緒が好きか」

「好きだ」

「そうか」

思わず誠一は笑つてしまつた。あまりにも率直な問いかけに我ながら恥ずかしくなつたが、それ以上に率直な真の答えが誠一を動かした。まわりくどいことは真には通じないだろうし、もう面倒になつてしまつたのだ。真相手に取り繕おうとする自分がおかしかつた。「真、頼む。俺が心配しなくていいくらい常識持て。そんで雪緒の

そばにいろ

「俺が非常識みたいな言い方するな。で、お前はどこのつもりだ」

「どうかその辺」

「お前は俺の話聞いてたか？」

真が眉間にシワを寄せるが、反対に誠一は苦笑いした。

「雪緒はお前になら任せられるって言つてるんだよ、真」

「お前は雪緒の父親か。お前こそどうなんだ」

「……ふん」

「いい加減認めろ。俺は最近自覚した」

「最近！？」

「ああ。信頼できる幼馴染から、もう一段階上がりたいと思つようになつた。雪緒がお前のことで愚痴を言つようになつてからだな。ある意味お前のおかげだ」

「おいおい、マジかよ……」

誠一は呆れたようにつぶやいた。

本人は隠していたつもりかもしれないが、真が雪緒に対してもういつた感情を抱いているのは誠一にはお見通しだった。だが、真は恋というものを自覚しきれていなかつたらしい。

「で、俺がそんなんだからやつぱりお前もだよな、誠一」

「お前みたいな单細胞と一緒にするな！」

「一緒にだ。お前は雪緒が好きだろ」

「当然だろう、と言つ切られて、誠一は肩をすくめてうなずいた。

「そうだな。好きだ」

「それなのになんだつて遠ざける。今まで通りでいいじゃないか

「そ昶はいかねーだろ」

あの停滞した空気が心地よかつた。真がいて、雪緒がいて。しかし、その状態で誠一と真の2人から想いを向けられれば、雪緒はどうちらの手もとれなくなつてしまつ。そうなつたら3人でいるのは辛

くなるばかりだ。

真と雪緒が苦しみ悩む。

誠一はそれを恐れていた。

ならば話は簡単だ。

1人、いなくなればいいのだ。

それは雪緒への思いを自覚した4年前からずっと考えていたことだった。

「あの時、俺があいつらから離れていれば」と悔やむことが怖かつた。それが、誠一の避けようとした「後悔」だ。肝心なのはいつが「あの時」になるのかを見極めることだった。

先延ばしにしているうちに時が流れてしまったが、誠一はようやく踏み切るきっかけを見つけた。

大橋愛梨だ。

彼女が真と雪緒を似合いで、と評価して同意を求められたとき、誠一は決心した。

だだをこねられることはわかつていて、それも時間が解決してくれる。自分がいなくなつても、真と雪緒が互いだけを必要とするようになれば、何も問題はないはずだった。

「身を引いたつもりか」

気にいらない、と真は目元を険しくした。

「別にそういうんじゃねーよ。俺よりお前のほうが雪緒に合つ

「相手は雪緒だ。俺だけじゃ手に負えない」

「なんとかなる。俺がいないのに慣れろよ」

誠一が困ったように笑つてみせるので、真は我慢できなくなつた。もう落ち着いて話してなんていられない。懸命にはりつけていた冷静な仮面は、もうとっくにはがれおちていた。

「慣れるわけないだろーーー。そうやってお前は雪緒だけでなく俺か

らも離れようとするんだ！」

真は立ち上がり、ベッドに座った誠一を見下ろした。誠一の睨みは重々しい鈍器に似ているが、真の睥睨は突き刺さる槍のようだつた。

「俺はお前がいないとダメだ。隣が落ち着かないんだ。雪緒が好きだとかどうとかは関係ない、俺の隣にはお前がいるべきなんだ！ そうでなければ……」

勢いはよいものの、真はの顔はくしゃりとゆがんで頼りない。まるで帰り道を失った子どものようだ。

「俺はどうしたらいいのかわからない」

真の言葉が誠一の胸につきわたる。
お前もか。俺だけじゃないのか。

たまらない喪失感に襲われ、何もできずに動けなかつたさつきまでの自分と、好き勝手に動き回つていていた真が重なる。

俺には真が必要で、真は俺が必要か。

くだらない依存だつたが、誠一と真には何よりも代えがたいものだつた。ある意味では雪緒への恋慕を断つよりも辛い。

誠一はようやくそのことに気付いた。

また一つ、新たな「後悔」を発見してしまつた。

こうしていれば芋づる式に見つけてしまつ。

誠一は途方に暮れた。

どうしたらいい。

どうしたら。

3人でいらっしゃるらしいのに。

しかし、一度気づいてしまつたものに嘘はつけない。先延ばしこは限度がある。真がしっかりと自覚してしまつた以上、もう逃げられないだろう。

誠一はうなだれた。

「……俺たちだけで話していくてもダメだな、これは」
真はふうっと大きく息をつき、椅子に座りなおした。眼鏡をかけ
なおすと、改めて携帯電話の電源を入れた。

「おい、それは……！」

今度は誠一の手も届かない。真は手早くボタンを押し、目当ての
人物の番号を呼び出した。

「雪緒？ 今いいか」

第1-5話 誠一と真 その2（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

第1-6話 雪緒と愛梨 その2

愛梨は紅茶で喉を潤すと、ぐつと雪緒に身を乗り出してきた。

「や、やっぱりその前にコッキーに聞きたいんだけど…」

「うん？」

「コッキーって、好きな人いる？」

「そうくるか。

雪緒は意識的に出来うる限り口角を上げ、目を細めた。

「いるよ

愛梨は気押されたかのように田を見開いたが、すぐに気を取り直して言葉をつなげた。

「それって、それって富田センパイ！？」

じりすよつなゆつくりとした動作で紅茶を口に含む。これを、愛梨は無言の肯定とみなした。人の恋愛話はおもしろい。愛梨は年頃の娘らしく胸を高鳴らせた。

「告白しないの？」

「別に」

「もつたいないよ、絶対両想いなのに！」

「どうしてわかるの」

切羽詰まったような様子の愛梨に、雪緒はカップで口元を隠したまま問い合わせた。

「わかるよー、だって2人はずっと一緒にいたし、センパイはあんなにコッキーに優しいし！ 本人にはわかんないかもしれないけど、センパイはすつじく優しい田でコッキーのこと見てるよ。間違いないよ」

「大橋さん、ちょっと抑えよつ

「あ

店内の注目を集めてしまっていたことに気付く、愛梨はよつやく口を閉じた。

「大橋さんには、真さんがそう見えるんだ」

「うん！」

愛梨は勢いよくうなずく。そんな彼女に、雪緒はこの前学校で別れ際に見せた、艶やかすぎる視線を送った。

「じゃあ、誠一さんはどう？」

「え？」

雪緒は意識的に作つた微笑みを崩さずに言った。

「誠一さんは、私のことどう思つてるかな」

「……え？」

愛梨の心が大きく揺れるのがわかつた。

雪緒はそれに満足感と自分への嫌悪感の両方を覚えた。

「せ、誠一センパイ？」

「そりゃ、私、誠一さんが好きなの」

愛梨は耐えられない、といつたように顔をひきつらせた。

「つ、うそー、じゃあ富田センパイは…？ 好きじゃないの…？ それなのにあんなにいつも一緒にいるの…？」

「真さんも好き。勘違いしないで」

雪緒はさらりと言つた。

「な、にそれ。おかしいよ。どっちが好きなの？ もうやだな、ユツキー。友達として、じゃなくて恋愛の話だけば。は、はつきり言つてよー」

愛梨は唇を震わせながら、雪緒の言葉をなんとか[冗談に持ち込もうとした。彼女の価値観からすれば信じられないのだらけ。雪緒にしても理解してほしいとはまったく思つていない。

「私は、誠一さんと真さんの両方が好きなの。ずっとこうしょにいたいと思つてる」

雪緒が愛梨の望み通り「はつきり」と言つたことで、愛梨はさらりに体を震わせる。

「そんなのひどい、一股じゃん！ ユッキー、それはまずこよ

「なぜ？」

「不誠実だよ…」

雪緒はわざとらしく首をかしげてみせた。

「どうして？ 私は3人でいたいだけなのに」

「でもそれって富田センパイと誠一センパイを裏切つてる

愛梨はじつと雪緒を見つめた。

雪緒はこれから愛梨の愛の価値観について講釈を受けるものと思つていた。誠実に誰かを愛するということ。互いに想い合つことの素晴らしさ、大切さ。そんなところか。

しかし愛梨は驚くべきことをした。少なくとも雪緒の想定外。慈悲深い聖母のような表情を浮かべたのだ。

「ね、ユッキー。もしかしてユッキーの気持ちって、恋じゃないんじゃないかな。ユッキーはただいつしょにいたいだけじょ。それは富田センパイの気持ちを無視してるんじゃない？」

「無視？」

「ごめん。あたし、ようやくわかつた」

愛梨は痛ましげに目を伏せた。

「ユッキーは嘘ついてなかつたんだね。本当に2人はつきあつてなかつた。富田センパイがユッキーに片思いしてたんだ。でも、ユッキーは誠一センパイとの関係も崩したくなかったから、応えられなかつたんだね。あたし、本当に無神経なと言つてた。ごめんなさい」

愛梨はペニ、と頭を下げる。今までの激情はビリしたのか、とうほどじょらしくなつていた。

「誠一センパイは、そんな富田センパイを見かねてわざと怒ったフリして離れようとしてたんでしょ？ ユッキーはそれがイヤなんだよね。わかるよ。だって、すつぐ仲良かつたもんね」

「……」

雪緒は作り笑いを消した。そして愛梨のポーテールをじっとみつめている。

「でもさ、やっぱりそれって不自然な付き合いで方になっちゃうよ。大丈夫、富田センパイと付き合ったとしても、誠一センパイはいなくなつたりしないんだから。大事な幼馴染でしょ？」案外、それで十分だつたりするんだよ。今ま同じや富田センパイも、気を遣つてる誠一センパイもかわいそう。コッキーだつて身動きとれなくなつちやう。よくないよ、そんなの」

愛梨はいきなり腕をのばし、テーブル越しに雪緒の手を握つた。

「ちょっと落ち着いて考えてみてよ。ね？」

愛梨は幼子をなだめるようにうなずいてみせた。

そして再び凍りつく。

雪緒の瞳の、あまりの冷たさに。

「話を聞かないのね、大橋さんつて」「……え？」

雪緒は優しいともいえる仕草で愛梨の手を引き離した。

「私は恋愛感情込みで誠一さんと真さんが好きなの。その上で3人でいたいと思つていい。大橋さん、もう一度聞くけど、誠一さんは私のことどう思つてると思う？」

愛梨は目を大きく見開いた。

「大橋さんは相手の感情の機微に敏感だから、本当はわかってるんじゃない。それでもわからないフリをするなんて、やっぱり大橋さんでしょ。それでもわからないんだと思つて」

「んて器用」

いつでも天真爛漫、周囲に笑顔と愛をふりまく人氣者が、苦しいでいる。愛梨が少女漫画の主人公なら、自分は主人公をいじめるイヤな女のポジションにいるのだろう。

「私はわかってる。でも誠一さんは残念なことにアナタ寄りの考え方で、恋愛は1対1でやるものだと思ってる」

雪緒はふつと息をついてから続けた。

「だから私は問題を先延ばしにしていた。幸い真さんは鈍感だし、誠一さんは繊細すぎて何も行動を起こさない。このままいれば、もうしばらくは3人一緒にいたのに。それなのにアナタが邪魔をした」

雪緒は自分で話しながら、再び愛梨への怒りがこみ上げてくるのを感じた。

自分に害をなすものを。
自分たちの素晴らしい角関係を崩そうとするものを。

「ねえ、大橋さん。アナタのアドバイス通りに私が真さんと恋人同士になつたら、アナタはどうするつもりなの？ 誠一さんに告白しようと思つた？」

愛梨はかあつと頬を染めた。走つたからでも寒いからでもなく、見透かされたことの羞恥心だ。

「ずるいね、大橋さん」

「ちがう！ ずるくない！ あたしは、誠一センパイが好き。あたしはユッキーと違うもん。誠一センパイだけが好き！」

「だから自分のほうが誠実だつて言いたいの？」

「……」

愛梨は雪緒の視線から逃れるようになつむいた。

「でも、誠一さんは大橋さんの気持ちには応えない
「なんでそんなこと言つの！？」

悲痛な声をあげる愛梨。感情が高ぶつたせいか、テーブルの上にぽたりと目からしづくが落ちるところが見えた。

こんな風に気持ちをストレートに表現できたら。雪緒はぼんやりとそう思つた。見えているのに見えないふりをして、終わりを迎えるのが怖くて気付かないフリをして。望んでその場にとどまつて、自分の気持ちも相手の気持ちも無視している自分とは大違つた。

「絶対、あげない」

雪緒は唇をかんだ。これではおもちゃを取られるのがイヤな子どもだ。だが、心境としては似たようなものだろう。子どもにとっておもちゃは数少ない宝物だ。雪緒にとって2人は、絶対に失えない宝物なのだから。誰にも触られたくない。

「大橋さんには、真さんも誠一さんもあげない」

「……それでも、あたしは誠一センパイが好き」

愛梨は顔をあげて雪緒に向かい合つた。目には涙がいっぱいにたまっているが、全身から雪緒に対する敵愾心が燃え出ていた。

雪緒はそれに少しばかり安心した。やたらと親しく好意を向けられるより、よっぽどましだった。

「大橋さんの気持ちは大橋さんだけのもの。私は口出しできない」

「だつたら誠一センパイだつてそうでしょう。口出ししないで！」

「いや。だつて

「私の、だもん。

そう言いかけたとき、カバンに入つたいた雪緒の携帯電話がブーッブーッとうなり始めた。

第1-6話 雪緒と愛梨 その2（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

第17話 ひねりの3人組

ピンポーン。

間抜けなチャイムの音が、誠一の上にのしかかる。

「俺が出よう」

そう言つて部屋を出る真を見送ることもできず、誠一はベッドで

つぶして倒れこんだ。

もは、いつなってはどうじょうもない。

とんとん、とこつ軽快に階段を上の音が2つ重なつて聞こえてくる。

「ほんとうに

……よつ

正面から向か合つことができず、誠一ははづぶせになつたまま返事をした。

「起きてる?」

「起きてる」

耳の傍で聞こえる澄んだ聲音に、誠一は動けなくなつてしまつた。

「せえーいーちせーん

「ぐえ」

ぼく、と胸中こまかがつてきた重み。

「おーきーて」

「起きてるつて言つてんだる……」

「真さん、こんなこと言つてるけど

「往生際が悪いぞ、誠一

「誠一、

誠一はしつしと背中にへばつっこむモノをじかし、よつやく身を起こした。

そしてベッドの横に立つ彼女をよつやく視界に入れた。思つた通り、「機嫌斜めのようだ。

「お久しぶり、誠一さん」

「ああ」

せつそくチクリとトゲをきかせてきた雪緒を前に、誠一は深く深くうなだれるのだった。

誠一は真以上に雪緒との接触を断つた。絶縁宣言すら真を通して伝えただけだ。それには大きな理由があった。

「つたぐ、やつぱりカサカサになつてゐるじゃねーか。クリーム塗れつて言つてんだろ！」

「だつて、『はん食べて洗つてトイレ行つて洗つてつてやってたら忘れちやうよ』

ベッドに並んで座つた雪緒は、せつやく誠一から怒りを帶びていた。「めんぢりくさがつて手えほひほひしてりや世話ねーよ。真、机の上に缶あるだら、それ取れ」

「これか？ ビーズが入つたこんなでかい缶、何に使うんだ」

「バカ野郎、それじゃねーよ！ 察しろ！ 右端のだよ、ハンドクリームつて書いてあんどうが」

「ああ、これか」

誠一は真が放つた小さな丸い缶を受け取ると、黄色がかつたクリームを少しだけとり、雪緒の手にすりつけていつた。無骨な手が器用に動き、雪緒の小さな手をつつむ。

「ありがとう、誠一さん」

「次からは自分でやれよ」

「もうそのセリフ耳にタロー」

「お前がやんねえからだろが！」

誠一がかみつくと、雪緒は田元をわざかにゆるめ、よつやく笑つ

て見せた。

「そう、私はやらない。だから誠一さんのせばこころの『ぐつと言葉につまる誠一を見て、真が楽しそうに笑った。』それそれがくすぶつた気持ちを抱えていたところに、3人そろつてみればたつた一瞬でいつも通りだ。」

誠一は弱い。とにかく弱い。何にとは言つまでもない。
雪緒にした。

もしも雪緒がそばにいたら、遠ざけるどころか自分から世話を焼いて近寄つて行つてしまつ。もしも機嫌が悪いようなら、どうにかしてあやさなくてはならぬよつた気がしてくる。

絶交だと言い放つたところで、「なんでそんなこと言ひの、誠一さん」とまつすぐ見つめられたらもうダメだ。その上へたーっとひとつつかれたら、誠一に拒否権はない。

そして恐ろしいことに、雪緒は誠一が自分に逆らえないことを知つていて。

だからこそ雪緒を遠ざけた。

雪緒も、誠一が納得しないまま絆されるのを良しとせず、誠一の気持ちをくんだのだ。しかしあつ限界だった。

「やつぱりこれが一番落ち着く」

真は満足げに言った。

誠一と雪緒も同意見だった。今となつてはあの2週間がばかりしくてしかたがない。だが、問題は何も解決していなかつた。

「ところで真さん、誠一さん。私、なんていきなり呼ばれたの」
雪緒は2人の顔を順番に見た。

「ああ。俺たちだけで話し合つていたんでは、何も解決しないんでな。雪緒にも来てもらつたんだ」

「何を解決するって?」

首をかしげた雪緒の顔をのぞきむよつとして真は言った。

「雪緒。俺は幼馴染としてではなく、女としてお前が好きだ」「な」

ど真ん中の剛速球に、雪緒は白い頬を一瞬で赤く染めた。横でそんなやり取りをされた誠一はたまつたものではない。いきなり何を言い出すんだコイツは！ と今まで何度も突っ込んだかわらないセリフを復唱する。だが、真はさらになるとでもないことを言つてのけた。

「おい、誠一。次はお前だ」

「はあ！？」

「こいつしない」とには話が進まない」

真は至極当然、とあいじで雪緒を睨みした。先ほどの戸口した相手ことるような態度ではない。

雪緒は田を丸くさせ、こつもの無表情をびしょ濡れにしたものがおろおろとしている。

真の言いたいことはわからなくてはいけない。こじでハッキリせようとこうのだりづ。そのためにはまず自分の気持ちを伝える、といつことりしこ。だからいつなんだとてこんな……。

ゴクリ、と自分が喉を鳴らす音がやけに大きく聞こえた。雪緒にも伝わつてしまつたらしく、こちらを見上げてくる。誠一は口の端がひきつるのを感じた。

「早くしり」

「うるせー、真一。誰もがお前みたいだとは思つない」

「ああ、ちくしょう！ 文句ならばいくらでも言えるの！」誠一はのしつたが、雪緒の不安と期待の入り混じった顔から田をそらすことことができなかつた。

「あー……。その、だな。雪緒

「うん」

「……まあ、そういうことだ」

「なんのことだ」

「真、お前は黙つてろ!」

「真さん、ちょっと口閉じて」

「なんだお前ら、人をなんだと思つてるんだ

真があからさまにふてくされるが、もう構つていられない。とこ

かく目の前の問題をせつねと終わらせねば、と誠一は呼吸を落ち着けた。

「えー、俺は、だな」

「うん」

雪緒の瞳に、自分の情けない姿が映っていることに気付いた誠一は大きく息をついた。

「…………はア。もつだめだ」

「ああ、なんでダメなの！　あとひと押し！　誠一さん！」

ウルム

「ただれてしまつた誠一を 雪緒は肩をゆさぶるよ」ほして原ました。なんていきなりこんな展開になつてしまつたのかはまったくわからないが、今を逃せば誠一は遠ざかるだけで一度と歩み寄つてはくれない気がした。雪緒はなんとしてもここで言質を取つておきたかったのだ。

「.....」

7

好きだ」

長い沈黙の後の、蚊の鳴くよつた小さな声。

それでも聞き逃すことなく
せて誠一の胸に飛び込んだ。

「あ、おー!!」。俺のトキ

真がべりりとひきはがすと、雪緒は今度は真にしがみついた。

雪緒はぐりぐりと真の胸に額をこすりつけながら、何度も言った。
何がやつたのか、正直自分でもわかつていなかつた。

雪緒は真のように鈍感ではない。眞の気持ちも、誠一の気持ちも

とつぐに知っていた。だが、やはり言葉で直接伝えられた嬉しさと安心感はたまらなかつた。

子どもじみた思いだとはわかっている。それでも、よつやく自分のものになつた、という独占欲が雪緒を満たしていた。「じゃあせつかくだ。雪緒からも言つてもうつか」

真は腕の中の雪緒に言つた。

「え?」

「俺たちばかりでは不公平だからな。言ふ。雪緒」
雪緒ははつと背筋を伸ばすと、わざとひじへ咳払いをして正面から真に向き直つた。

「えー、じ。真さん」

「なんだ」

真も真正面から雪緒を迎え撃つ。

「真さん、好きです」

「それは親愛だけではなく、恋愛感情をもつて、だな?」

「疑り深い」

恨みがまく雪緒が言つと、真は優しく笑つた。それでも耳と首筋が色づいてるので、雪緒は少し気分をよくした。

「重要な点だ。はつきりさせないとな」

「1人の男性として、真さんが好き」

「うん」

真は満足げにまたうなずいた。

さて、と雪緒は次に誠一の前に立つた。

ベッドに座つた誠一と立つた雪緒の頭の位置は、ほととぎすつゝらいにある。

「私は誠一さんが好き。もちろん恋愛感情をもつてして、です、誠一は何かこみあげてくるものをかみしめるよつて、おつくつとうなずいた。

誠一はおだやかに微笑んだ。鬼の面にかわいらしいリボンをつけたような不自然さがあつたが、それにおびえる人間はこの場にいた。

かつた。

「雪緒。お前はどうしたい

「え？」

「氣を使う必要はないんだ。お前がしたいようにしていい。恨みつこなしだろ、こういうのは」

「……」

雪緒からは興奮も喜びも消えていた。ただただ悲しそうだった。こんな顔を見たくなかつたのに。誠一は心が痛んだ。こんな選択を雪緒にはさせたくなかつた。真に乗せられるようにして告白してしまつたが、やはり自分は間違つていたのか。

「私には選べない。真さんと一緒にいたい。でも、誠一さんとも一緒にいたい」

誠一は痛ましげに雪緒を見つめた。

誠一が口を開こうとしたとき、それをとめるように真がパン、と手を打ち鳴らした。

「さて、これでわかつたな！」

真は輝くばかりの笑みを浮かべていた。

「何が？」

「何の話だ」

お前、今のやり取りの意味わかつてる？

感傷的な気分を壊された誠一と雪緒だつたが、真は一切気にしない。いや、気づいていない。

仁王立ちした真は、首をかしげている2人に対して首をかしげてみせた。

「なんだと？ わかつてないのか、お前ら」

「お前のぶつ壊れた思考回路なんて読めねーよ」

「右に同じ」

ねえ、と雪緒と誠一が顔を見合させて小馬鹿にしたような態度を示すと、真も負けじと鼻を鳴らした。

「誠一、つまりお前が間抜けだったといつことだ」

「はあ？」

まさか真に言われるとは思わなかつた。そんな様子で聞き返す誠一に、真は顔色一つ変えずにもう一度言つた。

「間抜けだ、といったんだ。お前が離れようとする必要なんかなかつたんだ。簡単なことじやないか、三人でいればいいだけの話だろう」

真は2人の顔を交互に見た。

「いいか、よく聞け。雪緒もだぞ。俺は雪緒が好きだ。雪緒のそばにいたい。だが実際どうだ、誠一がいないとどうにも雪緒とうまくいかない。それはなぜか？　俺が誠一を恋しがる雪緒をあやせないからだ」

「あやすつて……」

「真実だぞ、雪緒。誠一はお前を甘やかすのがとんでもなくうまいからな。そして、誠一のそばには俺がいなければならない。しかし2人だけだとダメだな、誠一は頭が固すぎてすぐに眉間にシワが寄る。俺はなんとか知らんが怒鳴られてばかりだ。雪緒という円滑剤が必要不可欠となる。そして誠一と雪緒、お前らが2人になつたとしたら、雪緒は甘やかされるばかりで煮詰まり、何らかの理由で俺が恋しくなるぞ。なにせ雪緒は俺のことも好きなんだからな」

雪緒は真の意図を正確に読み取つた。

自分がダダをこねるのではない。真流論理で誠一をその気にさせるのだ。

真はいつもこうして無理やりな論理展開を行い、慎重で「ぐぐぐ」と常識的な誠一に免罪符を与えてきた。だから誠一は行動できる。一方で真は何があつても誠一が支えてくれる、という信頼をもつていてから突飛な行動ができるのだ。雪緒はくやしいながらも、そういう2人の関係もよく理解していた。

真の推測はほぼ正解であるが、雪緒と誠一が2人だけになつた場合は想定する必要はないだろうと雪緒は思った。今回身を引こうとしたように、誠一が真を気遣つてそんな状況を作らないからだ。もし万が一、そばに真がないなんてなつたら、雪緒は誠一をひきつれて精一杯のダダをこねるだろう。対真の説得ならば、方法が単純明快なほど効果が上がる。

真の思考回路は少々常識外れではあるが、「これしかない。口をはさもうとする誠一を抑えつけながら、目だけで真に先を促した。

「つまりだ。俺たちはそれぞれの一辺を担つて正三角形を作つていないと、どうにもうまく動かないんだ。なに、今までの幼馴染としての友愛が恋愛に変わるだけだ。問題ない」

ネジぶつとんでんじやねえか、と思うことが多い幼馴染だつたが、まさかここまでとは。誠一は返す言葉もない。どうしたものか、戸惑つていると、ここでまさかの援護射撃が加わった。

「そう……だね。真さんの言うとおり」

しかも、真の方に。

「おい！ 雪緒まで何言い出してやがる」

「だつてそうでしょ。誠一さんだって真さんと一緒にいたいでしょう。でも誠一さんも真さんも私を好きでいてくれるんでしょう。万々歳」

「いや、それじゃマズいっつてんだろ？」「

「なんでだ」

真は心底ワケがわからない、という顔をしている。それが誠一には腹立たしい。

「だから、女一人の男一人じゃ計算あわねーだろうが！」

「誠一に対しても嫉妬しないワケではない。だが誠一だから雪緒にふ

さわしいと思えたんだ。そして俺は雪緒にも嫉妬する。なんだか時々お前たちばかり通じあって、俺が外されたような気持ちになる。しかしそれでも雪緒なら許そうと思えるんだ」

誠一は言い返せなかつた。

お似合いだと噂されている2人の仲睦まじい姿を見て、いられなくなつたことは数え切れない。雪緒に気を取られて自分の話を聞かない真に対し、額に青筋を浮かべたことだつて多々ある。

雪緒も同じだつた。どうしても入り込めない男同士の友情には何度も歯がみした。

それでもいいかと思えたのは、誠一が、真が、雪緒が、他の誰よりも信頼に足る相手だつたからだ。

「そして今、雪緒は俺たちを選んだんだ。そつだろ？？」

いきなり話をふられた雪緒は戸惑いながらもうなずいた。それを見てほらな、と真は胸をそらした。

「俺だつて同じだ。雪緒もほしいが、お前もほしいんだ。欠けたら意味がない。お前は違うのか」「……」

誠一はまたもや言い返せない。

本音なんて言えなかつた。それは非常に甘い誘惑であつたが、あまりに倫理に反しているように思えたし、常識外れだつた。

「誠一さん、なんでダメなの」

雪緒の問いかけに、誠一は自分の頭をガシガシとかきまわした。

「お前なア、それじゃ後々大変だろ？ 雪緒、お前はそうやって俺らと付き合つていつて、周りからどう思われる？ 二股扱いされていじめられるかもしれないんだぞ！ それに結婚とかどうするんだ。子どもは……つて、あ

思わず自分の口から出た言葉に誠一はかあッと顔を赤らめた。対象的に雪緒の瞳は喜色に染まる。

「うれしい。私と結婚まで考えてくるんだ」

「ああああああ！ 今のは言葉のあやだ！ つまり、一般常識的

におかしいだろ！　三人じゃ！」

「そこが馬鹿だというんだ、誠一」

「やうやう。そんなものにとらわれてたら人生楽しくないよ、誠一さん」

「お前ら……」

誠一を真ん中にベッドに座つた真は、がつしりとその肩に腕をまわした。雪緒はべつたりと誠一の横つ腹にしがみつく。

いつもこうだ！

誠一は心の中で叫んだ。見た目に反して破天荒なことばかりやらかす幼馴染のストッパー役を自認しているのに、なんだかんだで最終的には引っ張り込まれてしまう。

今時の学校つてもんは何を教えているのか。学力ばかりあつてもダメだ、という見本がなんだつて2人も自分の前にいるのか。俺にはこいつらに抗えない。

「諦めましょ、誠一さん」

「ああ、認めた方が気が楽になるぞ」

「つるせHよ！　開き直るな！」

正直なところ、この先面倒なことで山積みになるだらう。世間といつのはそういうものだ。だが、どうしたことか。そんな面倒事を回避するよりも、この3人でいることにより価値を見出してしまう自分がいる。

誠一は大きくため息をついた。

「あー、もういい。しばらく考えんのはやめだ……」

両脇から嬉しそうに笑顔を向けられるが、誠一は反対にどんどんと顔を険しくしていった。

「お前らには付き合い切れねーよ」

「まあまあ、そう言わず」

「とことん付き合つてもらおうじやないか」

真と雪緒は、もつ離すものか、と腕に力をこめたのだった。

第17話 ひさびさの3人組（後書き）

次回で最終回です。

ご意見・感想をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9958y/>

せいさんかっけい！

2012年1月10日20時54分発行